

清俗紀聞

六

清俗紀聞

112
6
113

館書圖京東				
六	一	一		
冊	架	函	類	門

清俗紀聞

第六

清俗紀聞卷之十二

祭禮



○先祖を祭ふる正月三月十月定式の祭祀あり夏至冬至も祭ふる有り

○此も家廟（一）祭（二）ありて祭ふる正月の廿九日の以主人盛

者一 家廟に至ると神主の亦も拈香一拜一跪く神主に

新春恭奉祭祀と告ぐ廟の側も高卓子をとりおれ神主

て後家廟を掃除潔淨（一）掃除（二）ぬぐ

神主は清く真像をとり書（一）行樂（二）又

付其（一）高卓子をすく大なる花瓶も

牡丹の造花をいけ

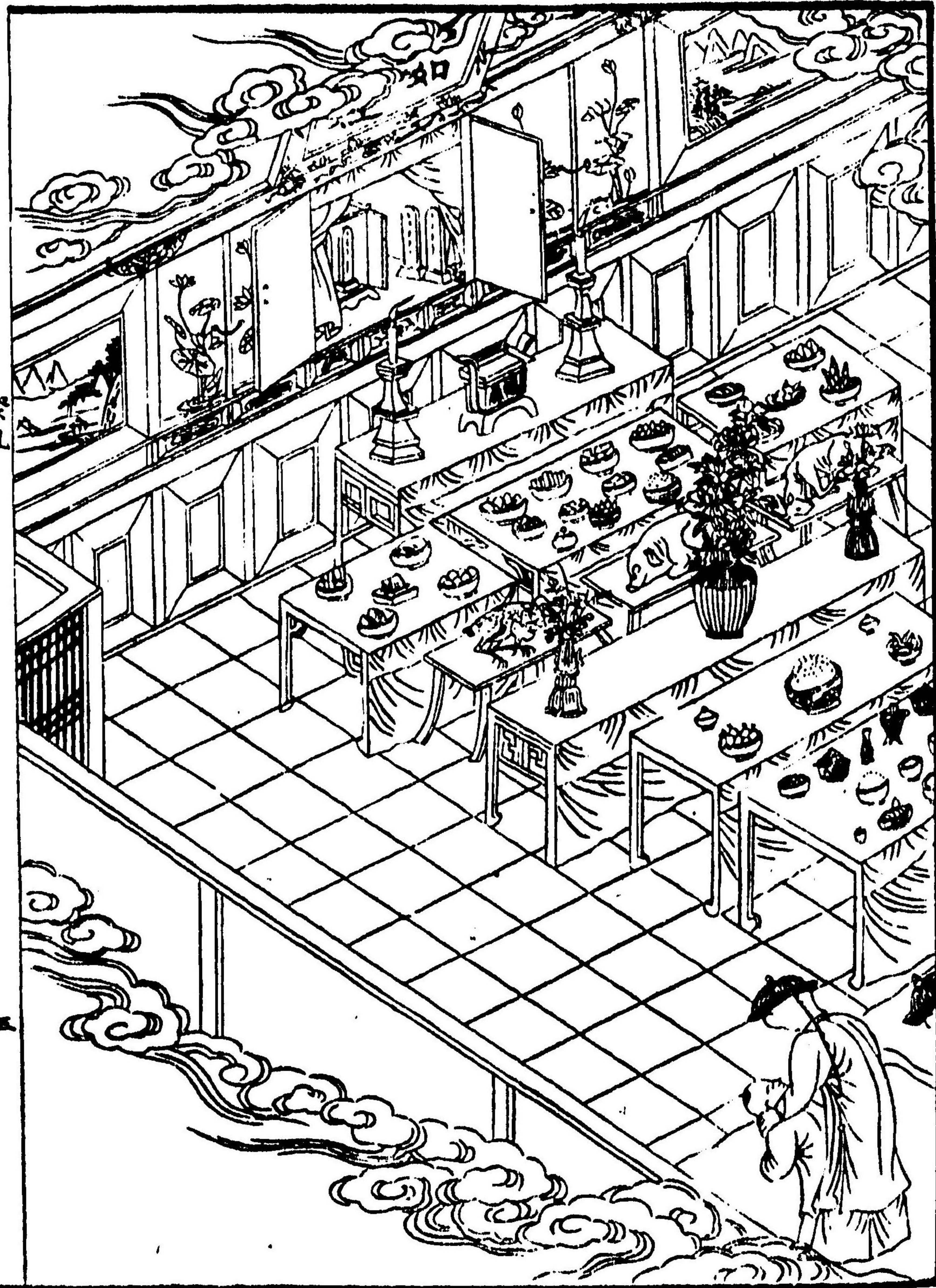
分挿し（一）五方（二）居（三）金燈籠（四）をかき焼物の皿も荔枝（五）竜眼（六）落花（七）生松子（八）

祭札

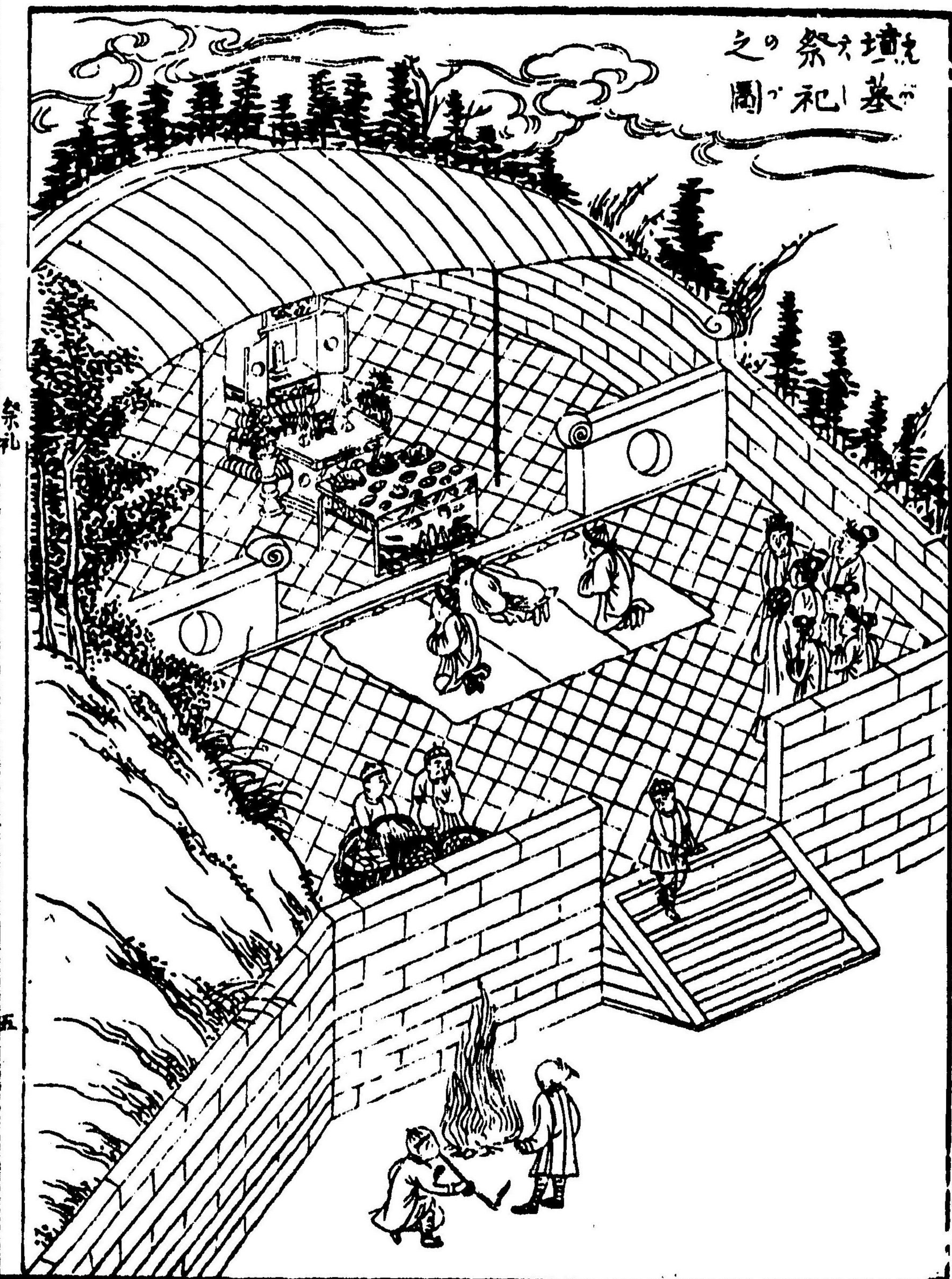
東瓜糖桔餅或ハ糕餅菓物種々ありひみ大根みく水仙花菊花等類
一供物都合二三十只備へ至元朝みら主人早辰沐浴盛服を
し子孫皆候を引領て家廟へ至り廟外まで盥洗し燈を懸し三牲
を備へ饌進す饌とは肉野菜類中にて儀器に當り
菓子み来神主一位毎に菓子一俵を備ふ爵盃み酒を盛主人
跪く盃を奠し畢りて拈香行儀也漢人の四拜儀人の
主人拜畢りて嫡子庶
子伯叔父姪婦女等同居の親族皆りて拜す廟拜畢りて家内の從儀
を述べの中刻以て徹饌す徹饌の時は主人子孫皆は悉く拈香行儀
を引たりある徹儀を三牲ありひみ饌の徹す其余の供物も其儀を
十八日乃至徹す饌を徹して暮るるみ三牲ならひみ饌の物を煮束して
家内残らず食ひを茂薦粥と進饌と元日むらりありて二日より
進饌眞酒等の事あり十五日上元佳節主人早辰主人盛服

多燭以照し香灰拈し眞酒寸三牲供物等そ受り十八日早辰
主人盛服し子孫を引領して盥洗し拈香礼拜し跪て伸えむひ
恭請徹位と告ぐ諸供物を徹し廟厨の扉を開して茶の香案
香爐燭臺を祀るる至廟門を閉す

家廟祭祀之圖



墳墓の祭祀
之の圖



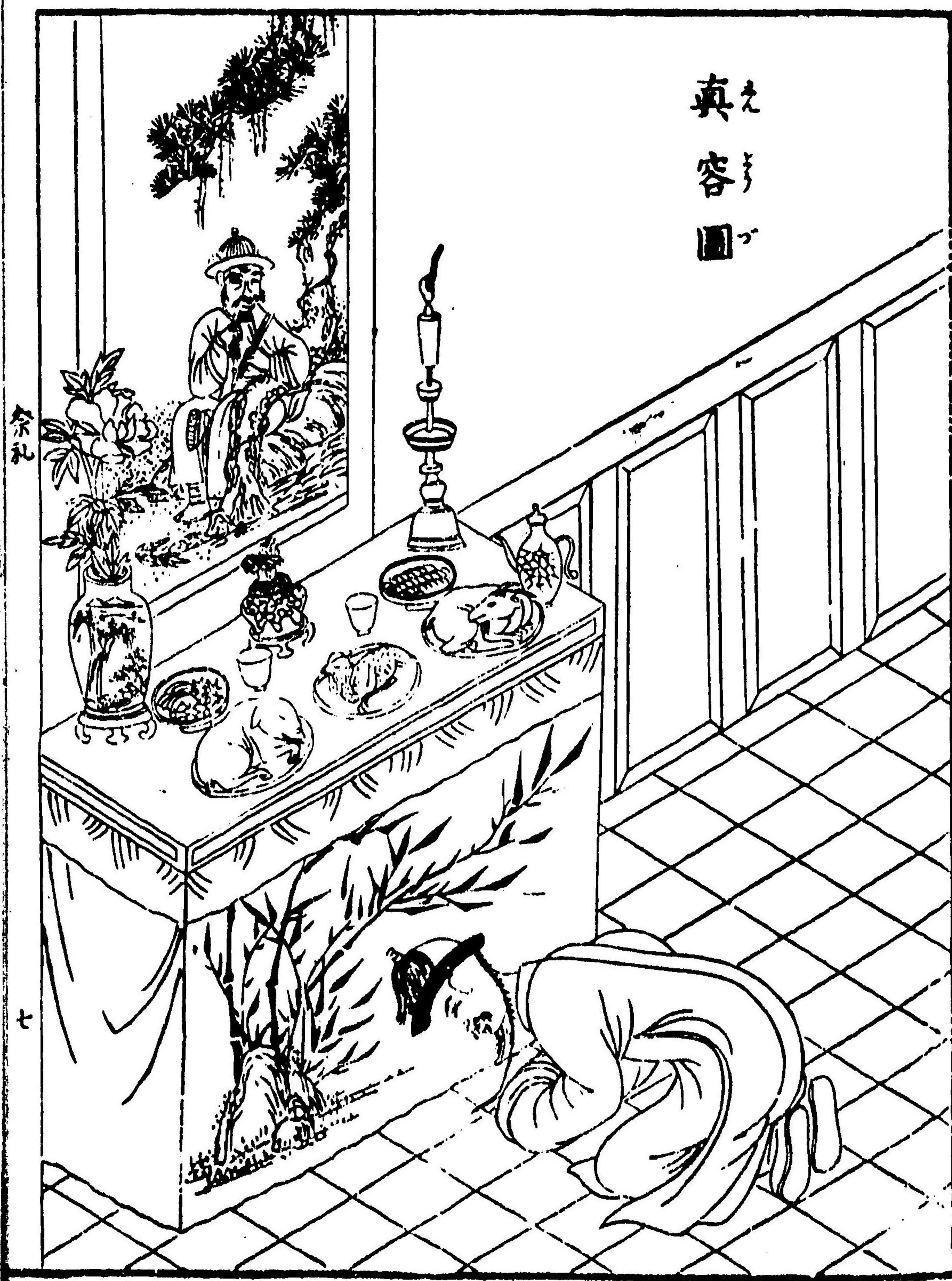
天幕を張 天幕ハ本條を藍色ヨリ 毛氈毯子を鋪く元組石碑の茶ぶとに卓を設
 至香燭燭臺を傍に燭を懸し線香を立供物を磁器小盃く使主人
 あらびみ子孫盥洗して猪ひ酒を盃眞一拵香札拜寸側み奴僕大金紙
 冥衣紙を焼捨ふ 大金紙冥衣紙の類 男子拜早して婦女拜は 此日ハ承内の男
朋友も案内して 拜早して拜時供物を徹し空小墓所み於て糞炊く
 墓死入清す 墓死ハ清す
 食し酒宴をかす祠堂あるものハ祠堂めく宴を催す 大々ハ墓所地面の
用み使 若親族朋友の内あるものハ腹を傍り祭早して山野景色を眺み
 もあむ 若親族朋友の内あるものハ
 あやむ行路自然山石を踏青とふ杭別を立西湖一舩をうり遊散す
 るものあり

○先祖祭の致齋齋戒等の事かゝらばに庶民の祭文はもろひま宿
 家御神等の祭文を用也○祖父父母の喪中かゝる毎月忌辰ふらひ朔
 望神主眞酒拈香して礼拝に毎日拜す事希く葬らるるいせふ
 且加壽拈香拈香をけり眞茶眞酒眞菜等あり葬つてのちら
 喪期の内神主成廳堂み置朔望忌辰の拜のちあり喪期満く神を
 を祠堂に移しての父母とて毎月忌辰の祭祀なり朔望に拈香を
 拈香眞酒して礼拝す本忌辰日ありとても祭事すかゝる且忌辰
 子孫吃素すまされ喪終つて後ハ周年一周三周年三年法會成執
 行い祭事此際僧道を請ふ追薦等三年後ハ十年同毎小進祭す法
 會小僧道を請ふ誦經をもり家廟中々多かり行ふ又廳堂ハ法會の
 神主之位を移して祭事あり僧道入布施して銀ありハ後を送る

先を懺資とす僧一人一日錢百文或は百五十文銀ありハ一かか
 二か後住持長老等銀下を禮を修法もよめて焰口等執行的に
 三百同五百同身分に應へ不用あり是を供物料多まて其内あり又
 誦經の上齋非時の食事をせり齋戒を早齋と云非時を晚齋と云
 僧誦經のまの盤木魚を鳴り此具を傍より持素もあり又家みり人
 をもあり盤木魚の圖式を傍に傍に又喪中の法會のまの僧道をも燻香焼燭
 を持素して贈ふ事あり喪中かゝる平常の法會みらむらるる
 經文と大畧晋門品金剛經等あり其餘ハ詳み知事あり
 ○周年三年十年同毎の法會進祭の式ハ春秋祭祀みたら朔
 望みら家廟へ三牲一副魚肉菓子類十種を二人主人早辰み沐
 浴し盛服して神主と酒を眞し拈香禮拜す

○開祖考妣祖考妣頭考妣々其人の誕生日ハ廳堂ハ真空圖をり
 香三牲魚肉菓子類をとり燭をとり饌を進し眞酒拈香し
 祭式式朔望おこなふ是を眞期といふ真空圖ハ父祖の末朔おこな
 開躰を正写みして掛物小仕立永遠進慕して念ふぬき念ふ祭期
 徳々在りてくう念まふ又五六十歳申をありて自分の像をりは
 ねく申あると哉平時得意の像をりてもいふ山水跋さるる人
 身山中めく景物遊覧の躰をりはめいふ琴書畫をりは
 志心類をり川をり行樂圖といひ又真空圖といふ

真空圖



○祭器卓碗碟等々多く平時需用の器潔淨なるは用中人かまを外み使入

るもあらざるなり ○家廟の大小廣狭と身が家贊の貧富相あはるる等

か寺方位向きの家作の向か意は只北向を掃く廟中平時の掃除點掃亦

ら奴僕經手はを掃除等の時廟厨の扉をふらざるをわす

○主人出入み祀に告ふ事かゝらひみま子は常家廟み見之志むる事

かゝ子孫做親中々必告ふ ○中秋重陽冬至の佳節みむる家廟

を祭ふ事れゝを家の舊例みよるを執行せよとある一定みわす

○家廟み佛像を安置せし神主を祀るに佛像の内廳み厨子を補ひ

安置す ○先祖の遺物の封固して潔淨なる匣み入る收貯し去み

他み生る遺物分給の事親族隠るる遺命めれは遠く子孫に於て

檀み賜る事を得る天親族或はまゝ親も朋友も父祖の筆跡を

を所望すは家廟み昔々詩文章の類の筆跡を賜ふもあらば後就

具名ら訪ふ事かゝ親なるを所せざる事もかゝ

○水火非常の節ハ吊刻家廟み至る神主を殘らば取集め櫛箱亦に

收れ子孫が姪附随ひ難を逃し親族朋友又ら寺院等へ預置難

静る後廟所恙なれば時々移して祭祀を執行せよ廟所燒失流

失破損等みく後を事あらば外み假廟を設け安置し臨時に

祭祀を執行す是を厭置爲祭祀とふ取集る時ハ事急あらば禮

儀み及むるは急難たりとも家廟を收めざる内ハ外事なり

○及る ○虞禱の祭祀し小祥大祥と別周年ニ事あり

○城隍と古一其地み徳を誦する各官婦賢を城隍神と崇め其地の守護

と諸省府州縣ともみ廟あり知縣以上の官到任して三日同あはひ

五日卯未香詣を是を城隍齋宿とふ祭式は春日禮房官州府部

舊例の儀法を申出三牲者の供物を兼(祭文を化)るは是を春日本官州府部

縣令州府部吉服州府部して禮房官州府部執事人役州府部を引領して城隍廟州府部

みまきし門州府部をめぐり馬轡州府部をもちて神茶州府部を奉り禮房官供物をそまへ

酒を奠州府部一燭州府部を奠州府部し奉りて本官三跪九叩首の礼をねまらひ其地の

安全を祈願し祭文をよみあも者禁化州府部を州府部祭文ハ讀祝官州府部よまふ州府部拜礼州府部畢

了て廟祝の宅州府部へつりて茶飲州府部を飲州府部み休息して帰館州府部以州府部廟祝州府部ハ其地中州府部

代州府部く廟祝をほむ朝延州府部の州府部もつとも城隍神古州府部まらふ其地州府部み名實等州府部あり

所と近縣近府の神祥をらんして安否州府部は惣して府内の城隍を州府部知

府小視州府部へ絲内の城隍と知縣小視州府部へ城隍をゆりふ也城隍神といふ

知列知縣ハ生民を司ふ官州府部をれハ陽官と呼ぶ城隍ハ陰府を州府部

孤負を司ふ也其陰官といふ三月清時州府部のまは内州府部年七月十五日朔日定式の祭

祀之此祭日ハ城隍神を大騎州府部母州府部未州府部未州府部せ郊外州府部漢州府部を州府部請州府部し仍祀孤の為州府部

兼州府部く構州府部わ州府部る廟壇州府部へ州府部遷州府部住州府部し州府部わ本官州府部を始州府部め衙門の諸官

御曲の耆老を引領して祭ふなり或は三牲魚肉野菜菓子類を數十種

使州府部燭州府部を点州府部し本官拈香州府部礼拜を次州府部み諸官州府部耆老等拜州府部了して諸官州府部吏州府部ハ

歸館州府部す其政諸人と兼指礼拜州府部は是を祀孤といふ陰間の孤州府部魂州府部ハも是も

祭ふ意あり祭終りて其日の申れ刻州府部以州府部廟州府部へ歸州府部し奉州府部ふ廟州府部ふての祭州府部を

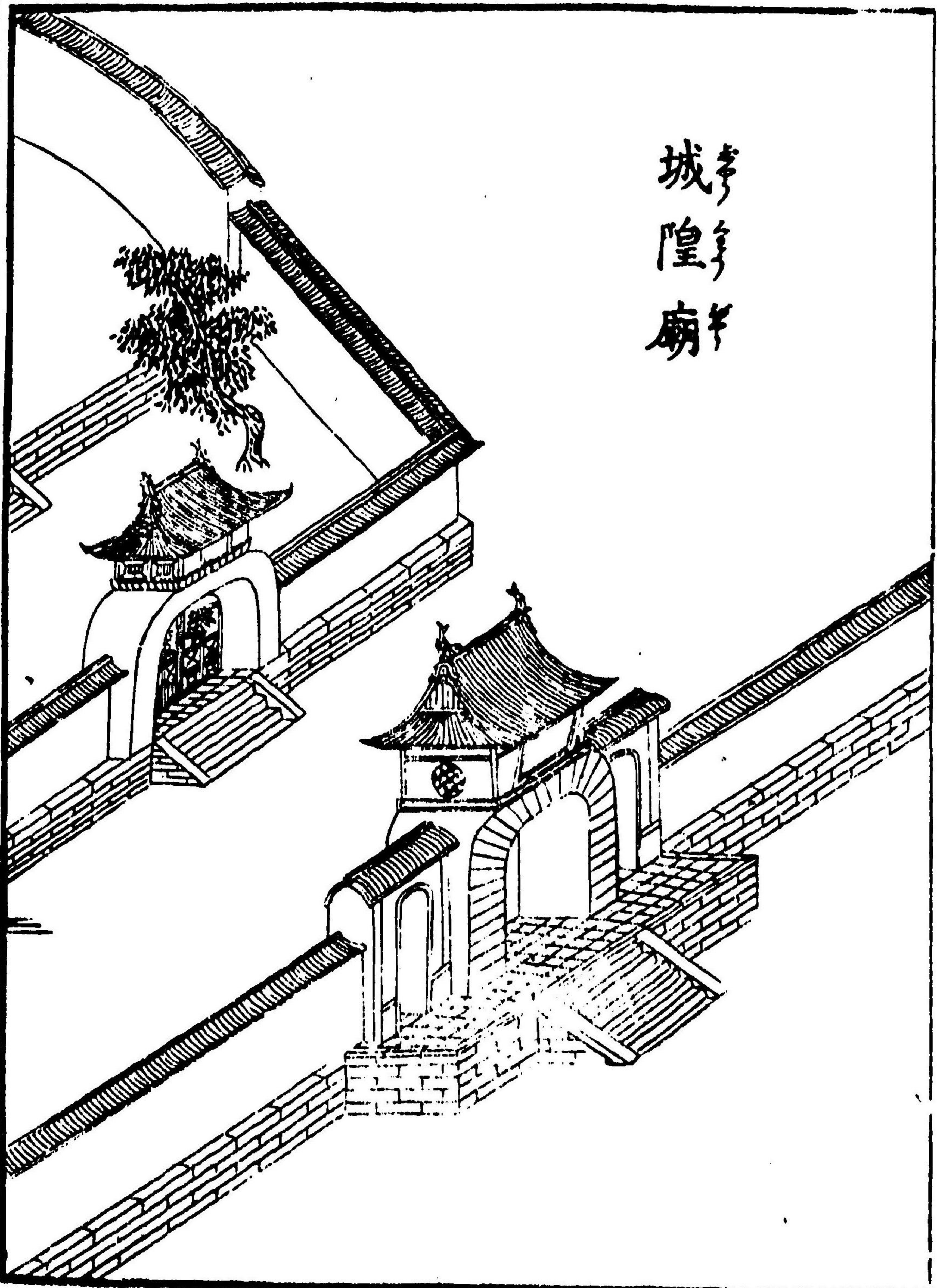
到任齋宿朔望中秋冬至州府部と外州府部と州府部か州府部し中秋冬至州府部ハ三牲供物を使

朔望州府部ハ三牲を使州府部也此祭州府部ハ官人兼指州府部を州府部奉州府部ふ州府部廟祝州府部を州府部供物

を使州府部祭州府部ふ官州府部ハ預州府部ふ祭州府部ハ清時七月十月の二祭也遷州府部座州府部の州府部行州府部列州府部の州府部方

と先に奉旨祭祀次ハ城隍使司と金字州府部を州府部書州府部ふ州府部行州府部牌州府部を州府部一對州府部奉州府部建州府部て

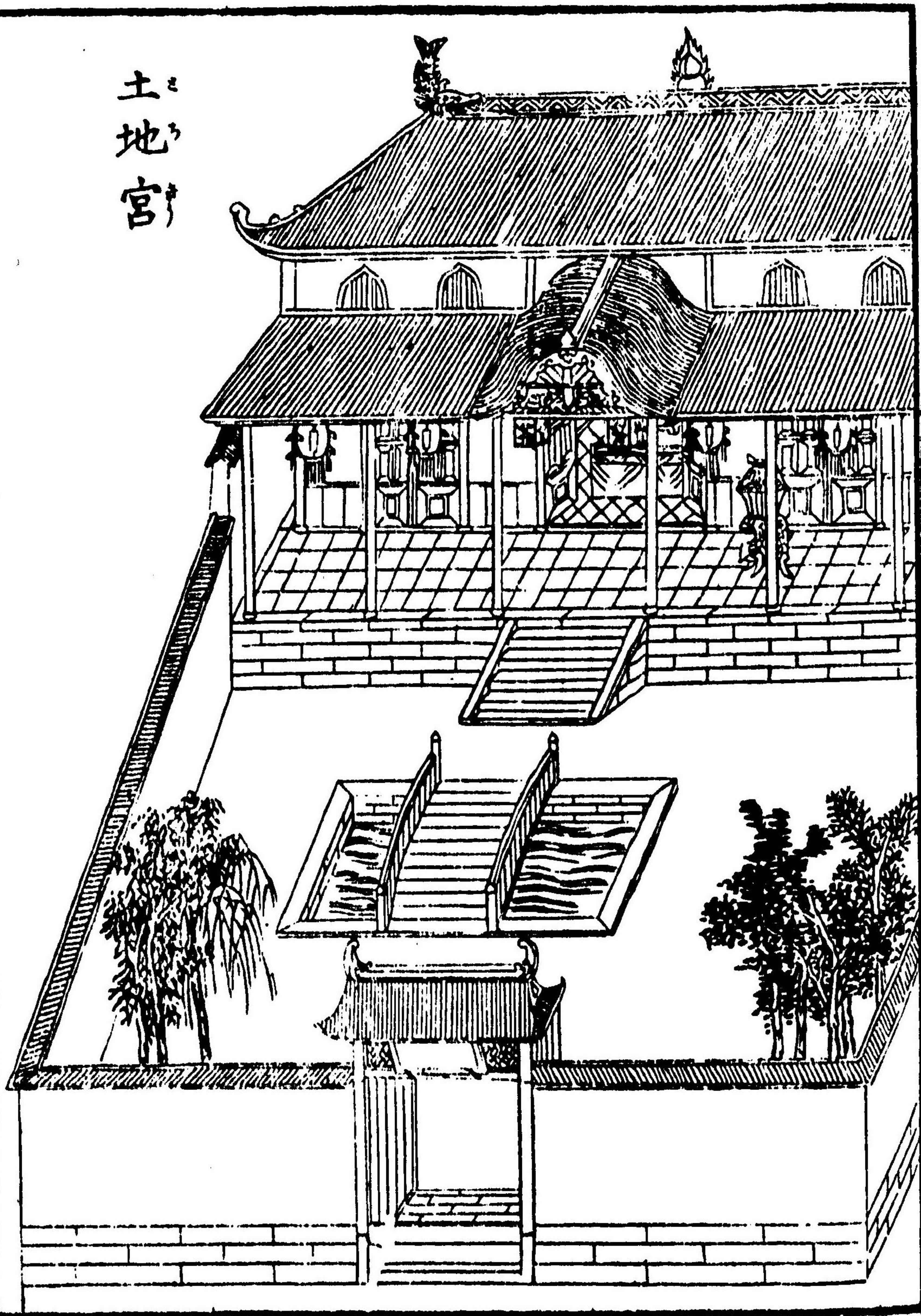
孝
隆
廟



謝城隍神郊祀



土地宮



執事旗鼓涼傘あり通ずる音楽を奏し
樂の樂戸司不史何等の曲成 右三
 度の祭祀ありびみ廟一竹年分の供物料香燭科ねんび祝官の俸米等
祭のふとつ中の人知事社司
 其地の物成みま開銷す城隍の像一本あり刻み手足三寸傾運動を後
カウロウ
 推し府列縣の官銜品級も隨ひて衣冠を刷ひ玉中ふの泥塑の像も
カウロウ
 唯神と銘を銘をり書ますなり都て神像あり
カウロウ
 ○土地宮土地宮 福德正神と稱し土地の守神なり郷里村落々々も土地神祠
土地の神也
 ありをいあむむなるの自敷比面の内ゆへ土神祠を造修し安泰及廟宇土地
カウロウ
 の大小よりして不同あり二月二日聖誕を日として祭祀す神降何一 廟内三牲供物
カウロウ
 種々種々香燭をとり祠官酒醴を奉り諸人素詣男女群集寺朝拜
カウロウ
 の致祭し地も故宮ありまあり祠官俸米もの莫もり祭祀香燭も乃
カウロウ
 科ハ諸人喜洽して奉りて一年の供料祠官の過活等不足あり

城隍神像



土公神像



○

天后聖母

天后聖母 俗名媽祖娘々々々

專海上の守護神也宋朝建隆元年三月廿二日福

建興化府湄洲

建興化府湄洲 媽祖廟

媽祖廟に於て刺史の官にあり教仕して

後天后誕生

後天后誕生 幼少より

智慧賢徳人ふ起十六歳の時道士より道を授

己修終

己修終 二十八歳の年

九月重陽白晝に神と化し湄洲の高山より昇天

して世々

して世々 神靈感應著し

位仰祈誓すふに應せざるまじり代々の帝王封賜

の勅あり

の勅あり 康熙廿三年

媽祖廟に於て天后を封賜し春秋祭祀免許の上あり湄洲

と聖誕の地

と聖誕の地 媽祖廟

を造営し神を安置し其外京師并諸省附

別縣

別縣 廟あり 廟門前に下馬牌を建

下馬牌ハ別建あり 祭祀の式ハ大年

祭を

祭を 其外種々供物を供へ

其外種々供物を供へるふ帛香燭を奠し其地の官員之を奉り

執事人員

執事人員 支配して

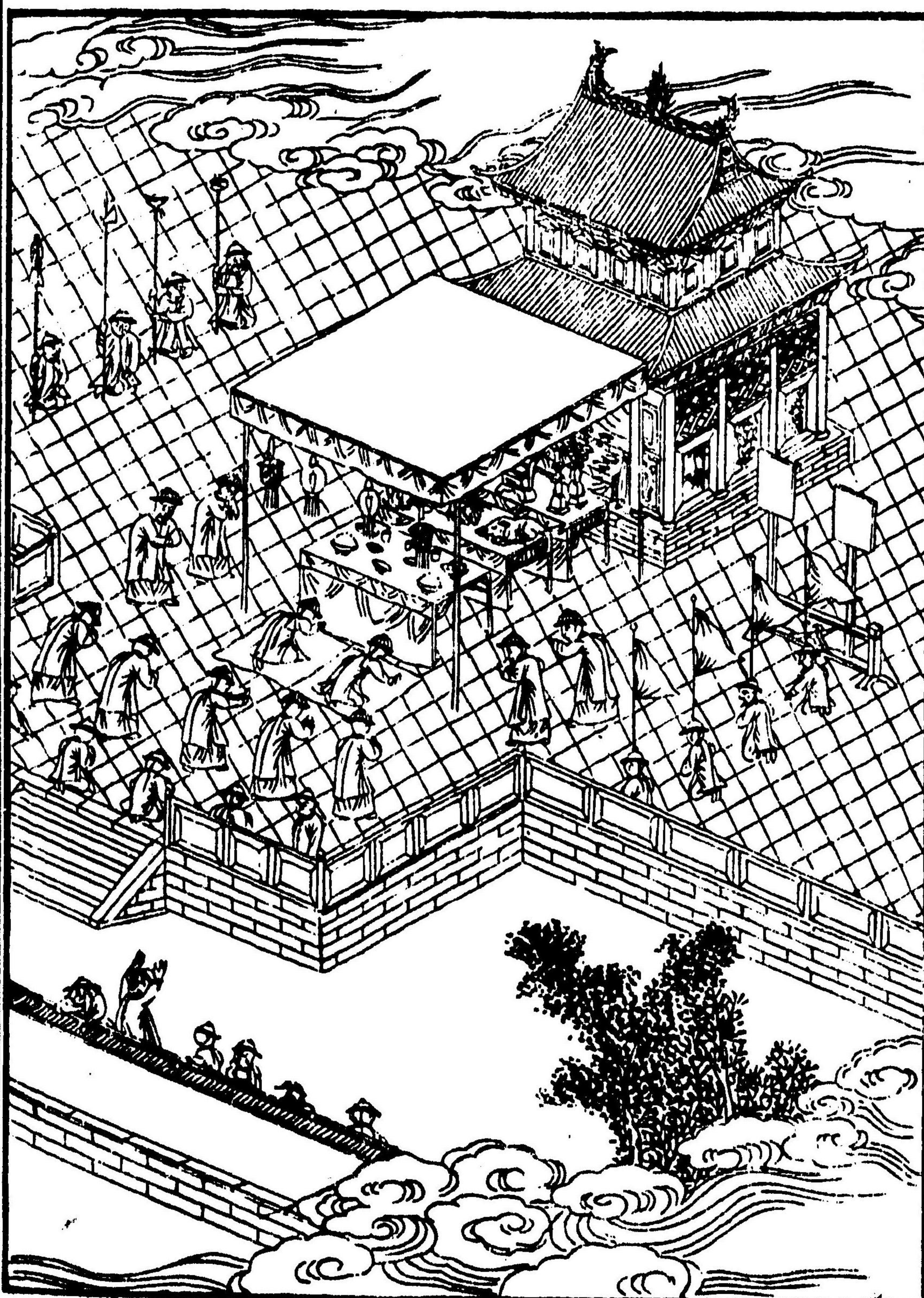
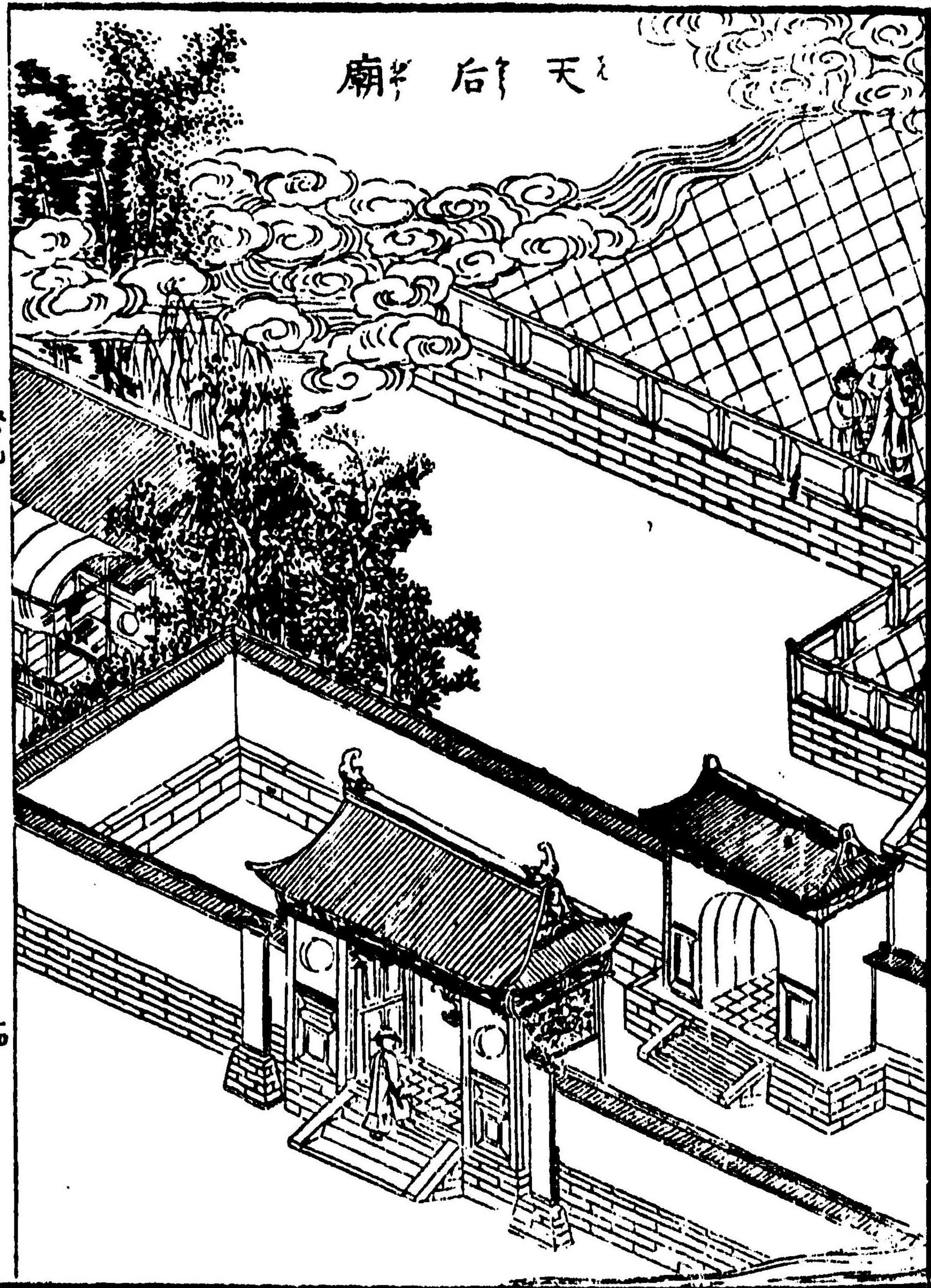
月々の朝廷より禮部官の内承祭官よりて勅命

祭文香帛

祭文香帛 捧献して

湄洲にあり祭祀ある京師の廟も亦あり

天 后 廟



五

廿

天后聖母像



欽差を去り止祭らしめ天子の奉養に

天子を奉養三跪九叩

諸省府州縣の廟

の其地の本官より禮房官(命)一祭祀の事を司りし祭日の本官兼諸官人

系籍止官人系籍年々諸人男女系籍群集也公府勿縣在大宰をりり

祭の神系の供物數十程香花燈燭鮮明也祭日二月廿三日を日祭の祭に春

秋二季の二月八月の上亥日を月日兼祭官も系籍の次第の祭日諸執事人員

齋戒して高良辰沐浴吉服して廟の祭の廟祝物を具し香を拵し年々て

長官(諸官の)も中其餘諸官執事列班す(並奉)贊禮官も方々三跪九叩首起坐の式を唱

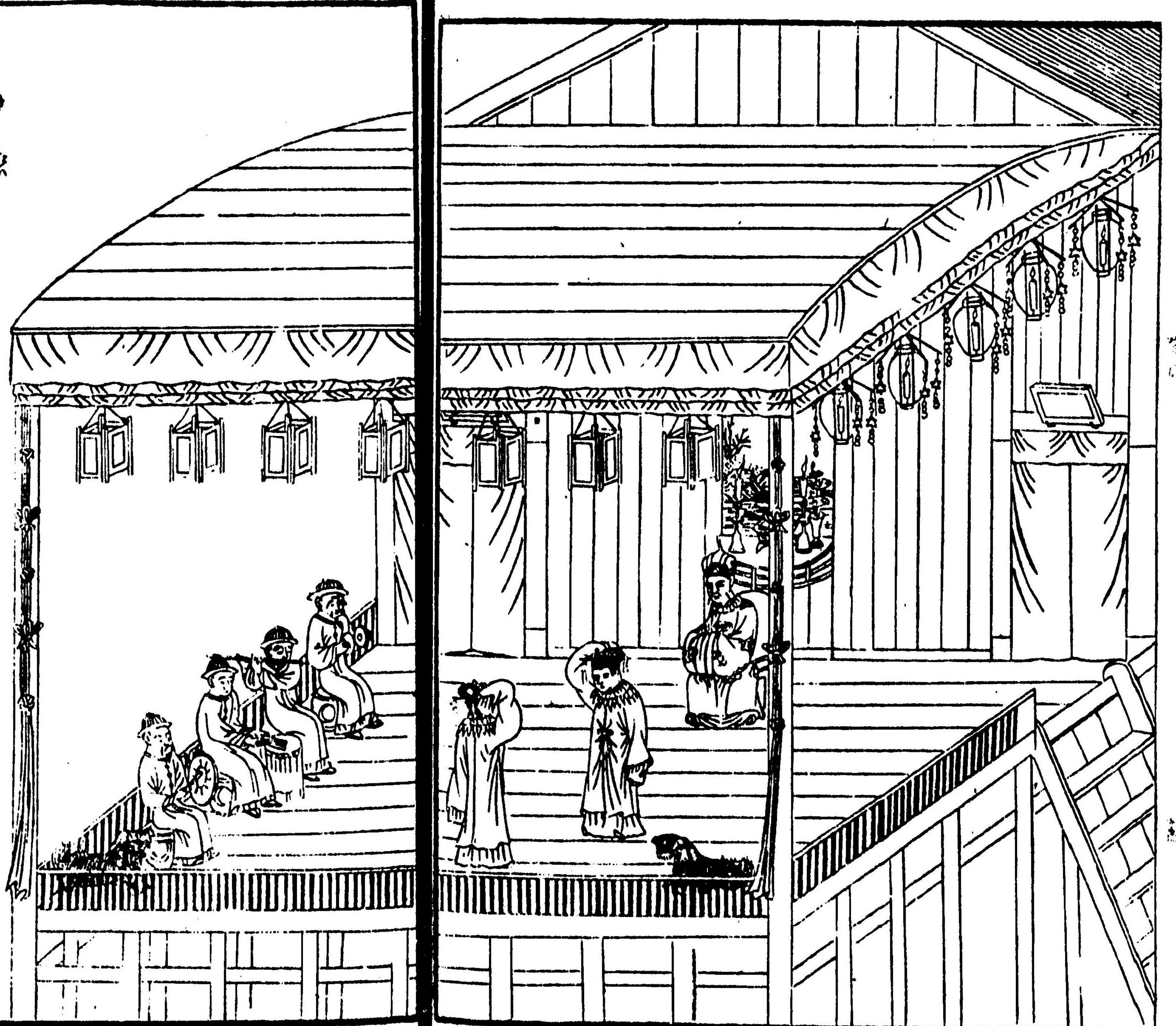
ふに復し諸官礼を以て讀祝官祭文を讀年々極化す(祭文の場)諸官群年々退散す

を其地の保甲(命)七諸人の口角華鬘を拵む祭日其の家は然面氏を施主として

做戲を催し廟門外の廣瓦場を戲臺を拵け做戲を献す系籍の諸人看戲すまで

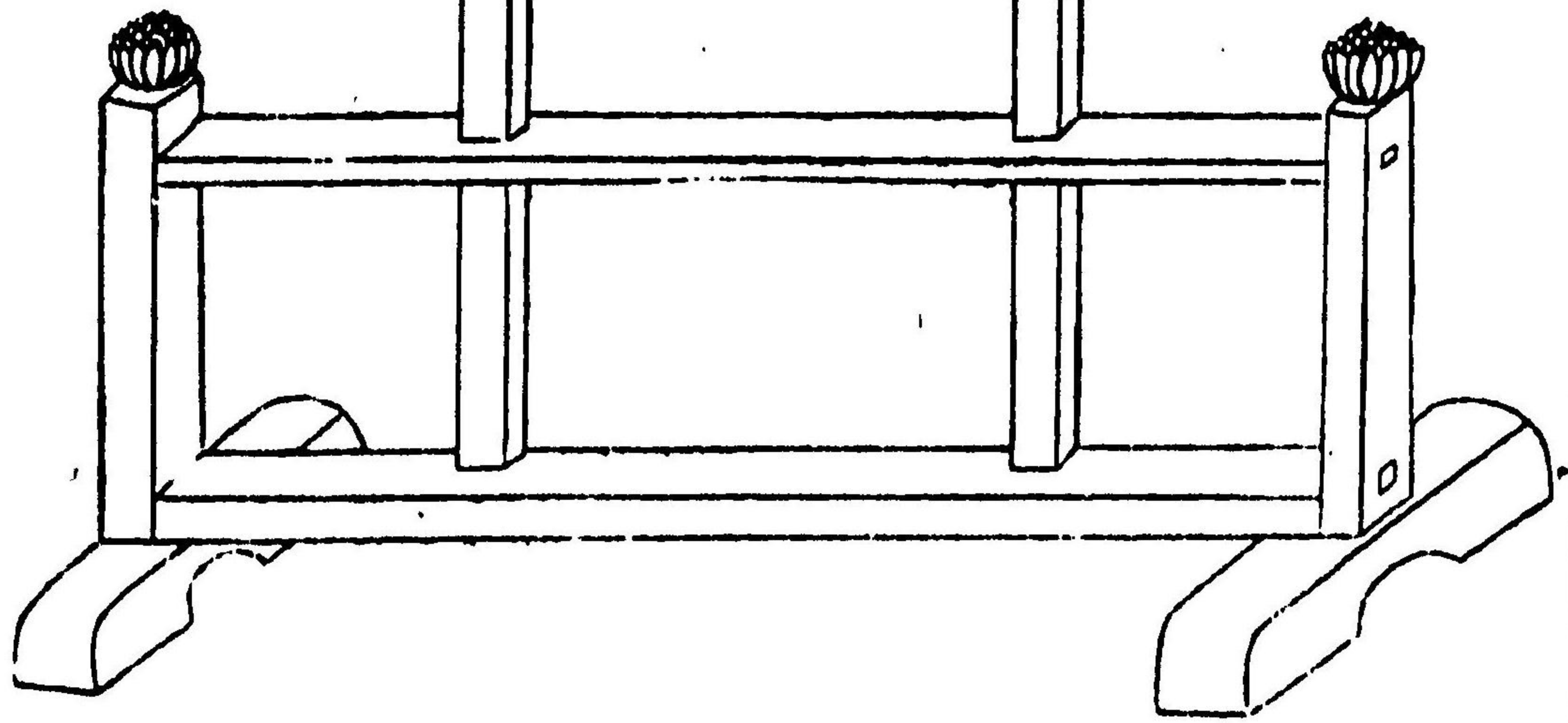
置夜開動す祭祀科香燭科廟祝俸米も其地の開銷みまき工部(由)也

戲臺



天后聖母

奉 旨 春秋祭祀



○關帝

關帝廟君之國老爺

武運の守護神として威靈感著一軍來るに祈りて

意せらるるは武臣の勿論外信民信仰の故他の神も祈請道府州縣に廟を建

至す武朝の皇御里村藩の度人とて侍侍せしは雅云年中は度津の城使起りて

靈驗ありて速に平靖せし故聖佑大帝と加封る春秋祭祀免許也廟門外に下馬牌を

大軍を以て参り参り五月十五日歸天葬まの日は定祭日とて春秋二祭の二月八日上戊

日を月定祭日とて侍人善信す男女を極せしむを做殿を献するは祭式祭料も開

銷の奉は天后廟も同じ○天后廟開廟たみ靈藏と云物一木藏も本或ハ竹を以て

を佐りて百枚一木藏の百と音まをりて相入く收す人先を振出して吉凶禍福を

別れ其音まの所れ吉凶禍福を示したる神託を詩句一木藏綴りて書札一木藏に板

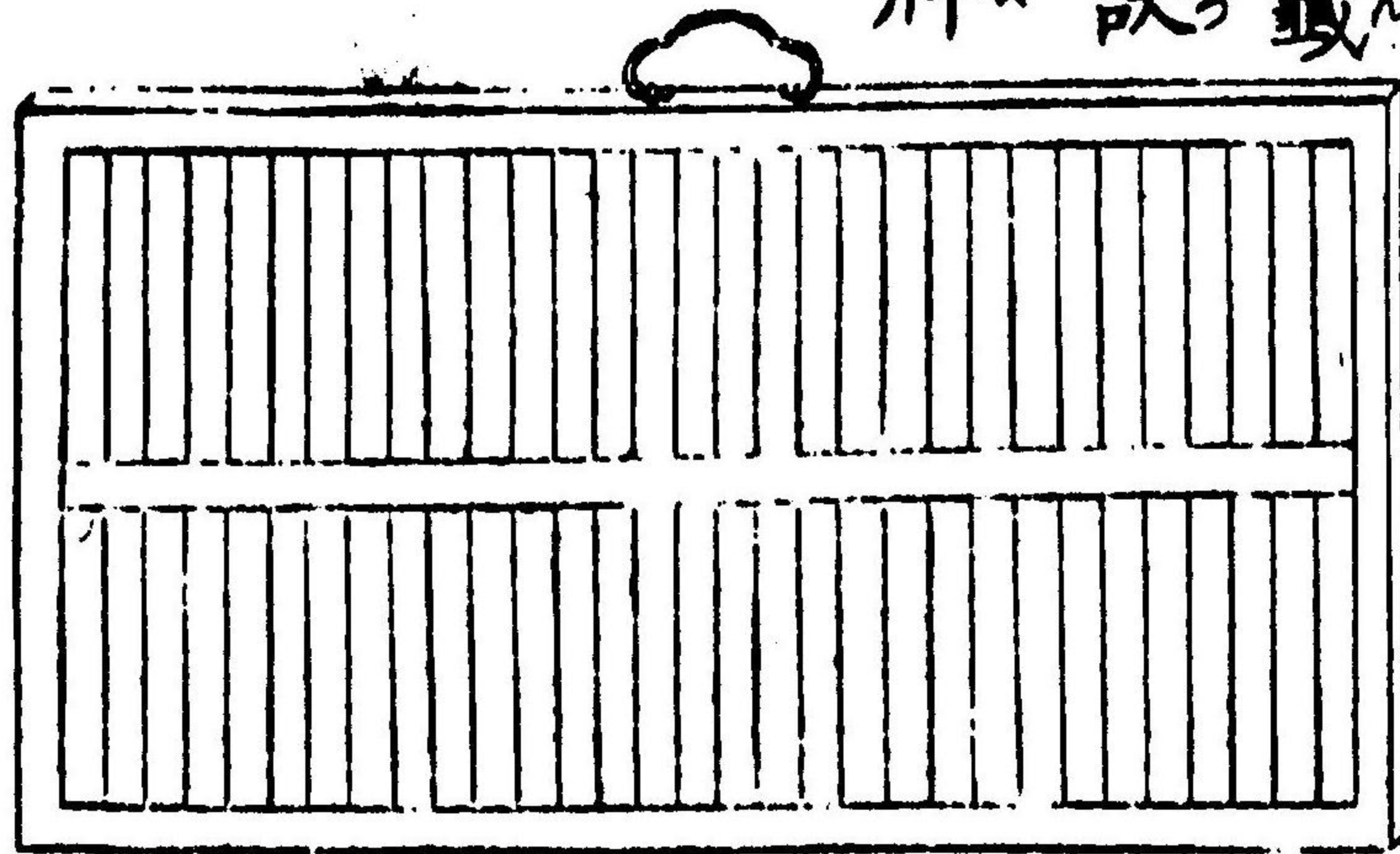
を先を籤訣牌一木藏といふ籤を振出し音まを籤より籤訣牌の音まの一行一木藏比

入るる吉凶禍福の意をあらわす

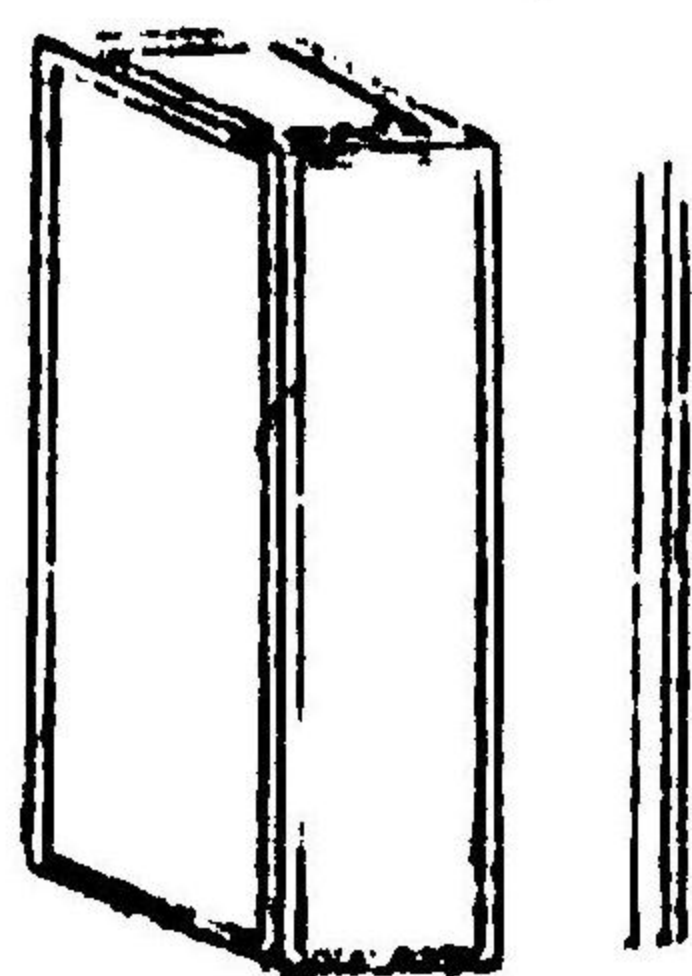
關聖帝像



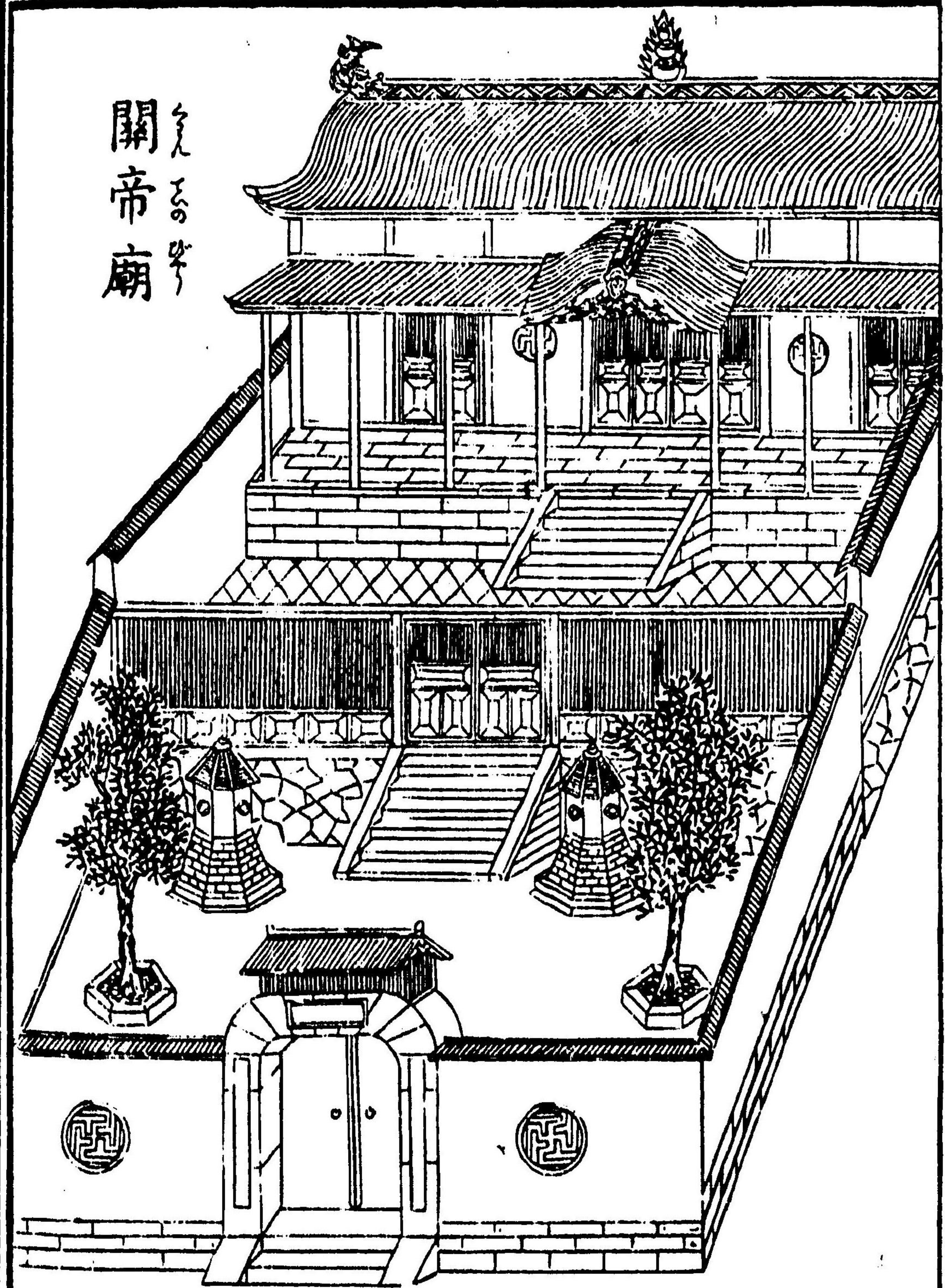
籤訣牌



靈籤



關帝廟



や去記してままなり奉山末寺等の制あり大寺の如く此の地を成山号に付さふ
寺成末寺と云はれ其の普陀山觀音寺の如く其山中の如く其の寺の末寺也
一山の精舎と其を寺に預つるあり大寺の任持の外首座都寺監寺典座知
客副寺等は重なるが役僧あり老僧ありのいと世を治むとい病僧等
めく勤めたる僧と銀子成納を勤め免る
是を養老僧とい
注律誦經の
過ふあり首座都寺以下は役僧とせばゆくはるが各日も止む寺内なる
の品級あり此方僧正檀林ありつらうた位位且ぬ衣紫衣船頭獨後扱
格式ともれ一隨從と官人のさうた事あり車轎おに格式ありて
ふくまらるるあり老僧ありひと病僧あり遠行の如く病僧あり
歩行の時侍者一人の外儀を連るが事も稀あり寺中役僧の時習儀も
まゝ勤る見も侍持よりとて開して昇降多し且僧隨身の如く如意拂

子禪杖鉄鉢にかたふ僧の奴僕ともつる事あり

○寺院の構営は大門二の門天王殿本堂禪堂岡山堂鐘樓鼓樓齋堂

浴室方丈客殿後寮厨下等あり都く一堂宛別楹も建を後寮齋堂浴
室等は一楹の内ゆく仕切りあり且梁間等定められ大門外へ不許堂
酒入山門と記しふ石牌をままま定法あり大門ゆへ何く禪寺とい
額成寺本堂ゆへ大雄寶殿と書るが額成寺其外殊額等は文字不
定法あり勅額給賜の寺二の門或る本堂の内ゆへ打並六門ゆへ勅額を
奉りて下馬牌等も事あり大門た右ゆへ金剛二の門た右前法ゆへ四天
王正面ゆへ彌勒菩薩正面の後ゆへ韋駄天尊を安置して本堂の奉るの釋迦
両側ゆへ羅漢を安置して奉るの前ゆへ皇帝萬歲萬歲と書るゆへ牌を
立るを龍牌とい此龍牌ハ寺院毎ゆへ奉り定法あり下ゆへ由也

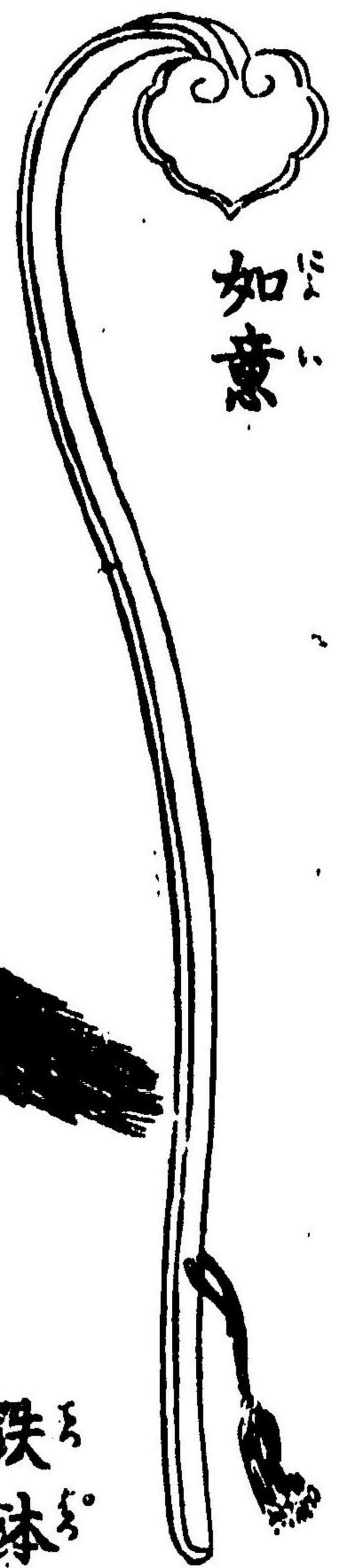
あつ別小朝廷より免許しふ事ありてあつ寺法めく並事ありて信く
龍牌の供料とて朝廷より寺附給賜等々事あり

○天子皇后より龍牌(上使等)朱指の事あり天子位牌神主等も並
並みありて其の官人年頭必ず寺院へ朱指し此龍牌を拜して
ふら朝廷へ拜賀すか事あり

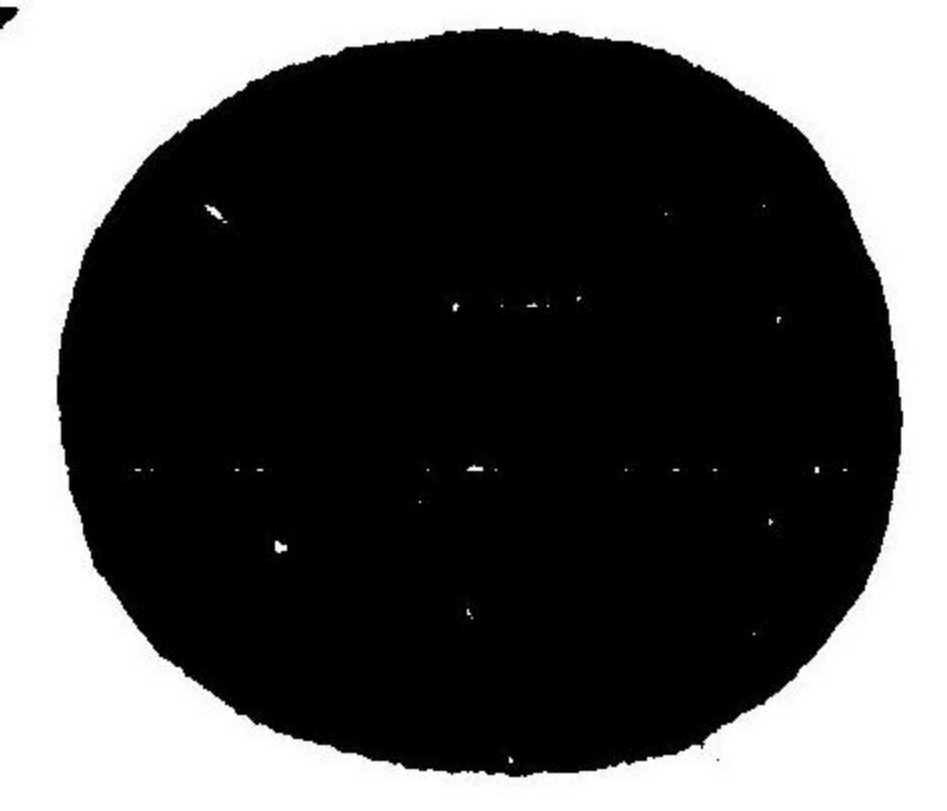
○天下の寺院を統領するは禮部の官なり諸觸等の其末は知縣中
後加給より寺院へ達の僧侶の精氣するは破戒不如法の僧尼方等々事知
縣中知事へ知縣ゆく裁判し輕重事の知縣切ゆく執りて其重なる事あり上
司小達一禮部(何の上)取らり多きは一山限り寺法の通執行ふ服衣の提
あつりて其詳も事能ら度牒と寺院の任持と知縣へ願知とは
聞候はしと其に知縣衙門みわらりて彼等の事五枚十枚免願清至剃度の



如意



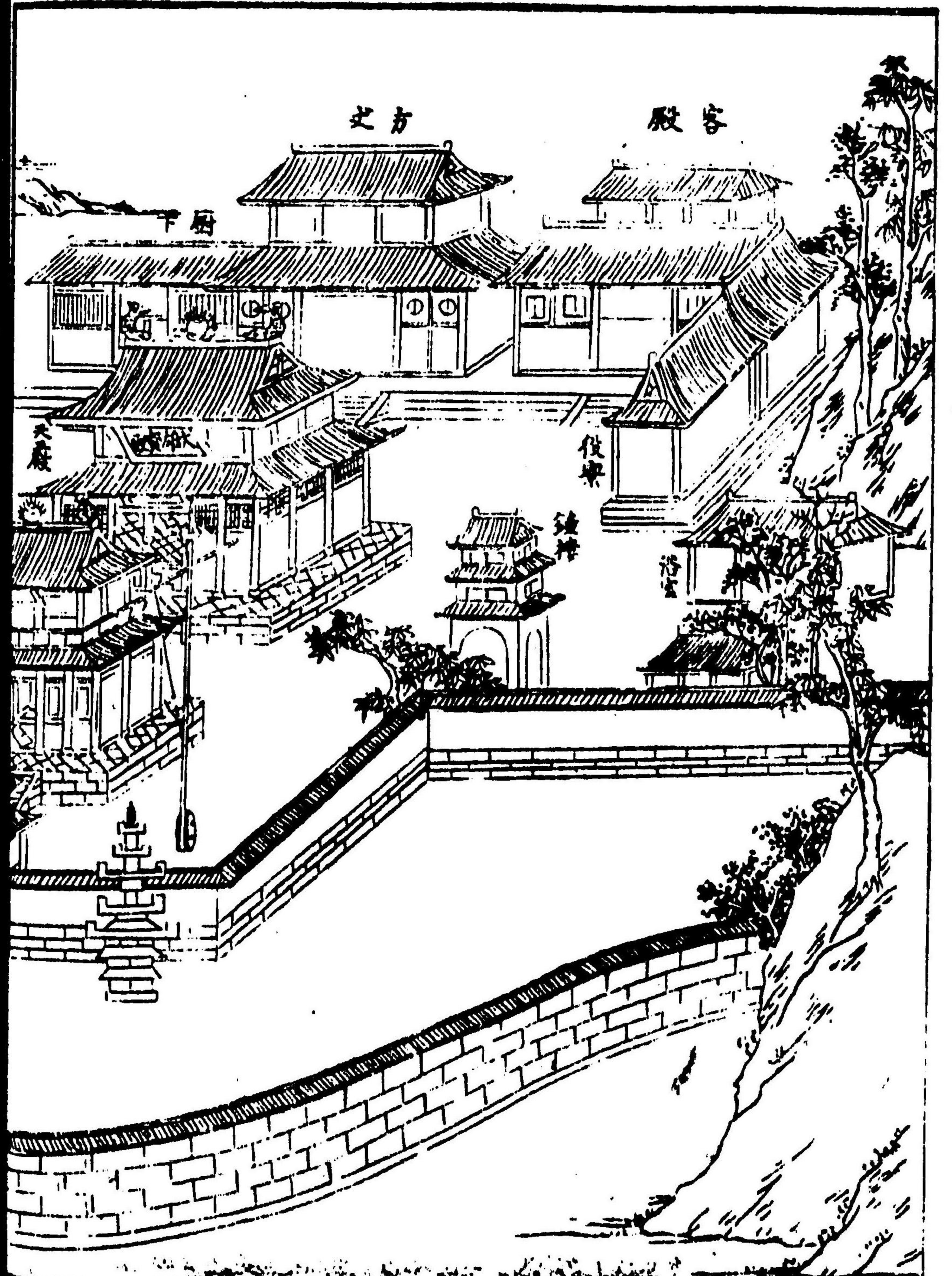
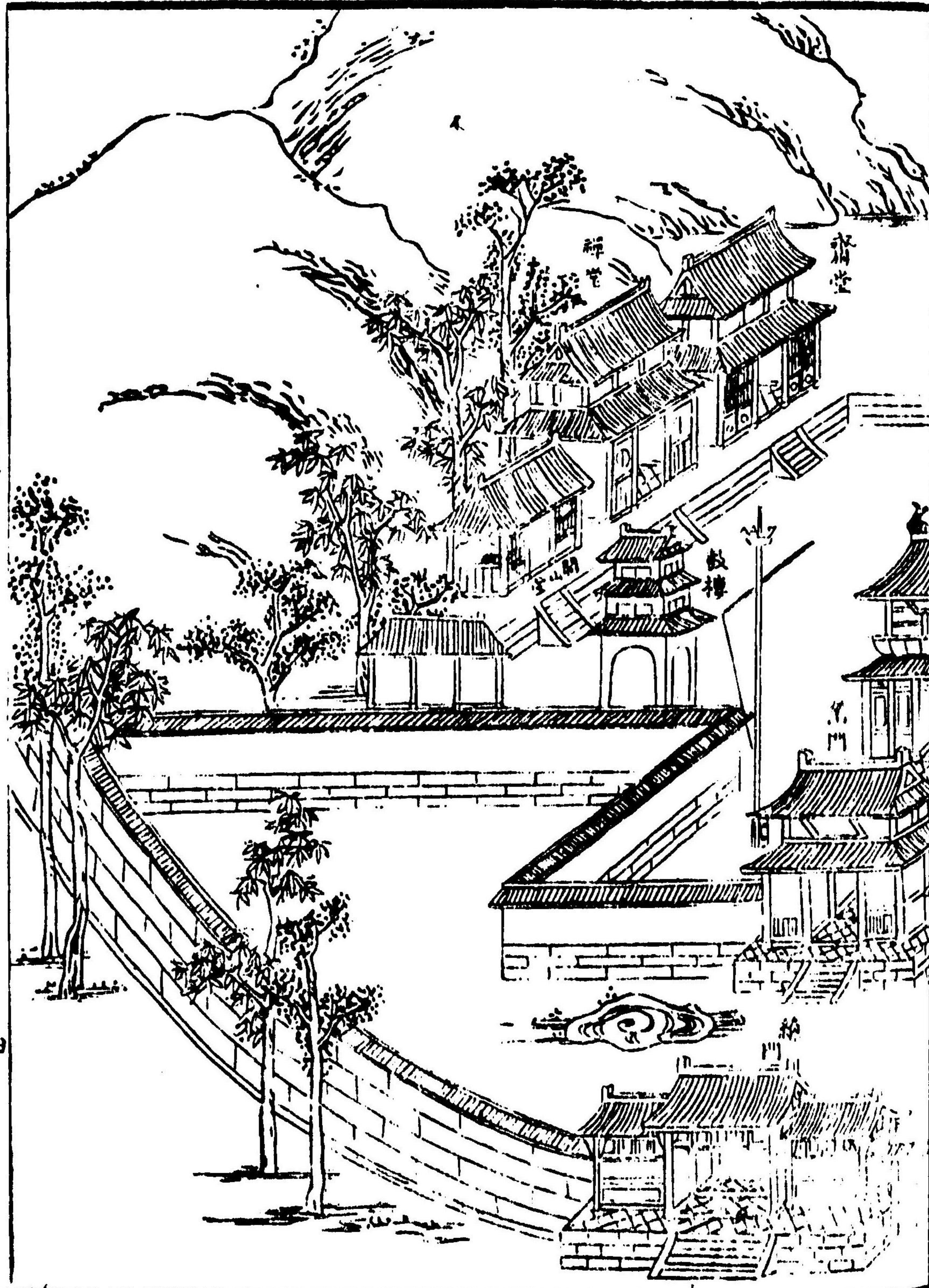
拂子



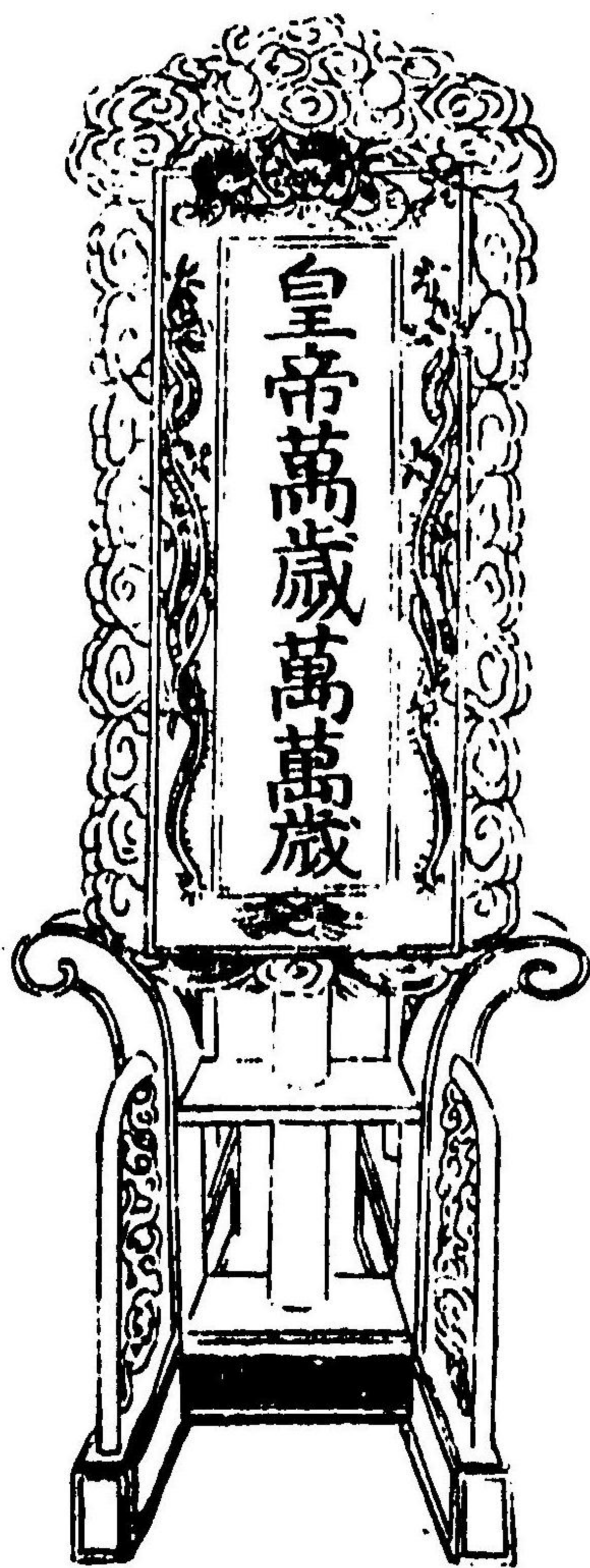
鉄鉢



錫杖



龍牌



山門外石碑

不許葷酒入山門

高廿六尺廣二尺二寸

僧あふり師の僧を住持と顔出と請ふも度牒年分の定数あひば
 剃度の人定数等あり且僧死するに度牒と其年寺へ返納と奉寺より
 官へ返す事なく奉寺に納むるも剃度の僧あふり名を成切之流す
 然り度牒は或る官府あひば僧家のことお招ふ支ゆく兼く見及ぶ奉
 ありふり奉あふり ○僧家の田地を都て僧に支配ありても民は絲
 の支配も寺院の田園を民に貸耕化せり年貢を収むる年貢未進
 不納等ありば懸へ顔出裁判あり其菜園や人夫を雇ひ耕作む
 ○新法邪教あひば寺中其異双物を忌まふハ割禁れ支たり寺院を標
 ぬ建まふりあふりあふり寺院の教をばらみ書留あふりあふりたぬ建まふり
 とは其地の知縣あふりハ國海の人造官に
 禪宗と法衣袈裟衣を著り
 袈裟ハ綿綿紗綾の類法衣々

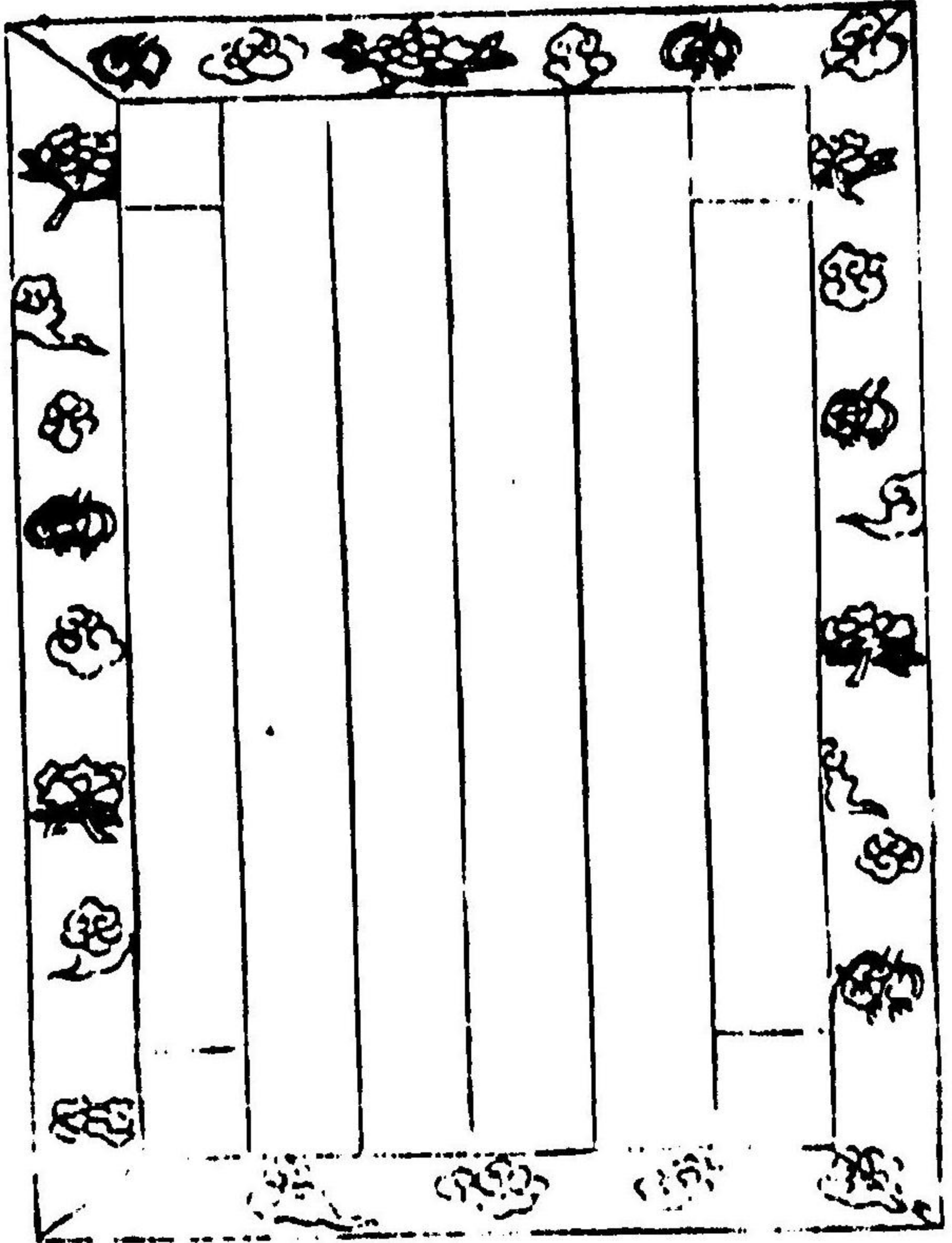
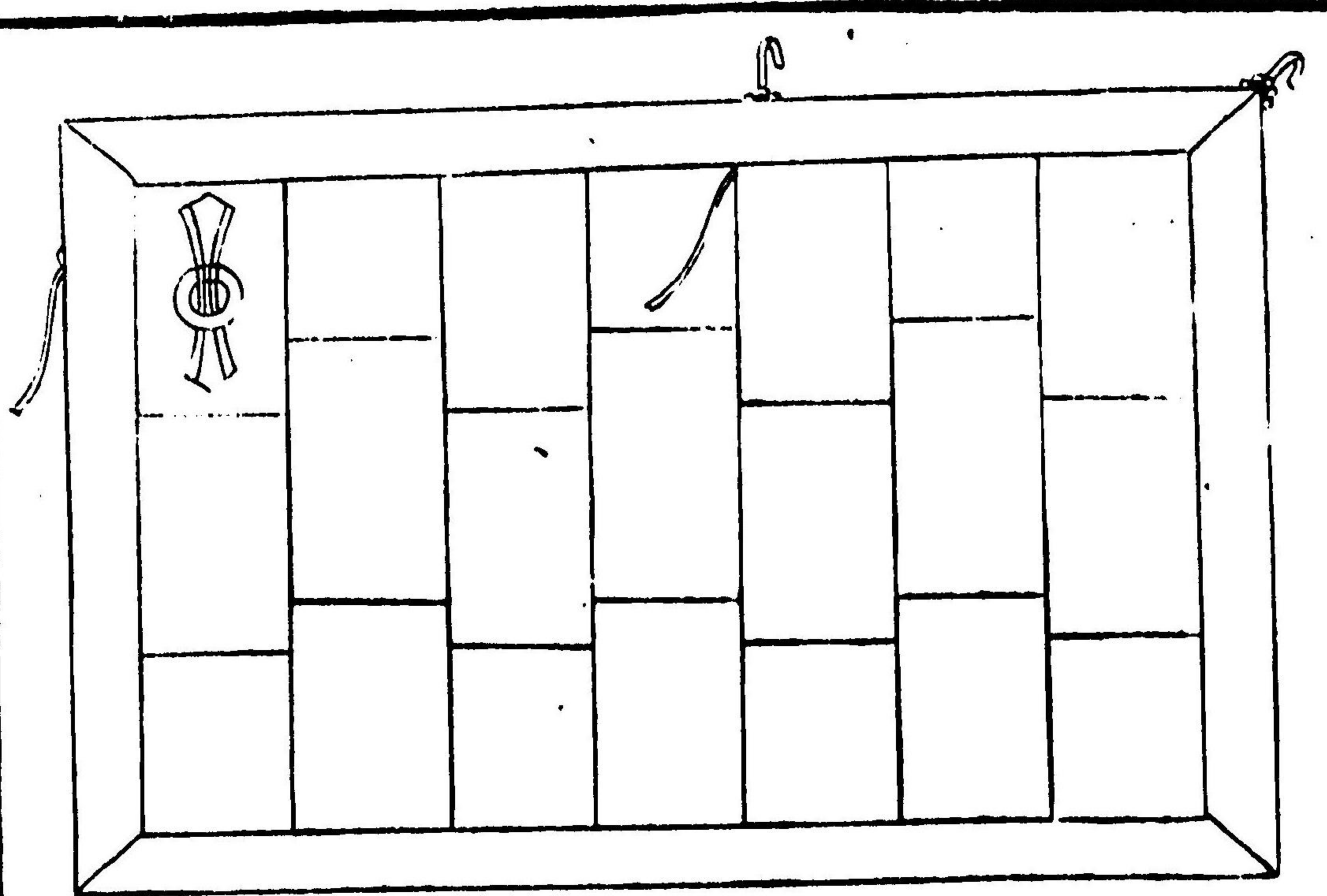
僧徒

五

假子縮綿等よく仕ふから法衣の制位持ハ黄色を用ひ長老ぬら色
各成用ゆ各等かへ平僧と兼衣あり右色衣み定りたる制か服と掃振と
袖短尺明朝の衣服のさへ絹地の衣服と制振みゆく大寺に位持いとも着すかま
を得ぬ帽子の法或みあつてふ人表まふか行ゆての用ひを寒中やぬら着す
おもあつ鞋と僧鞋とを別かあり

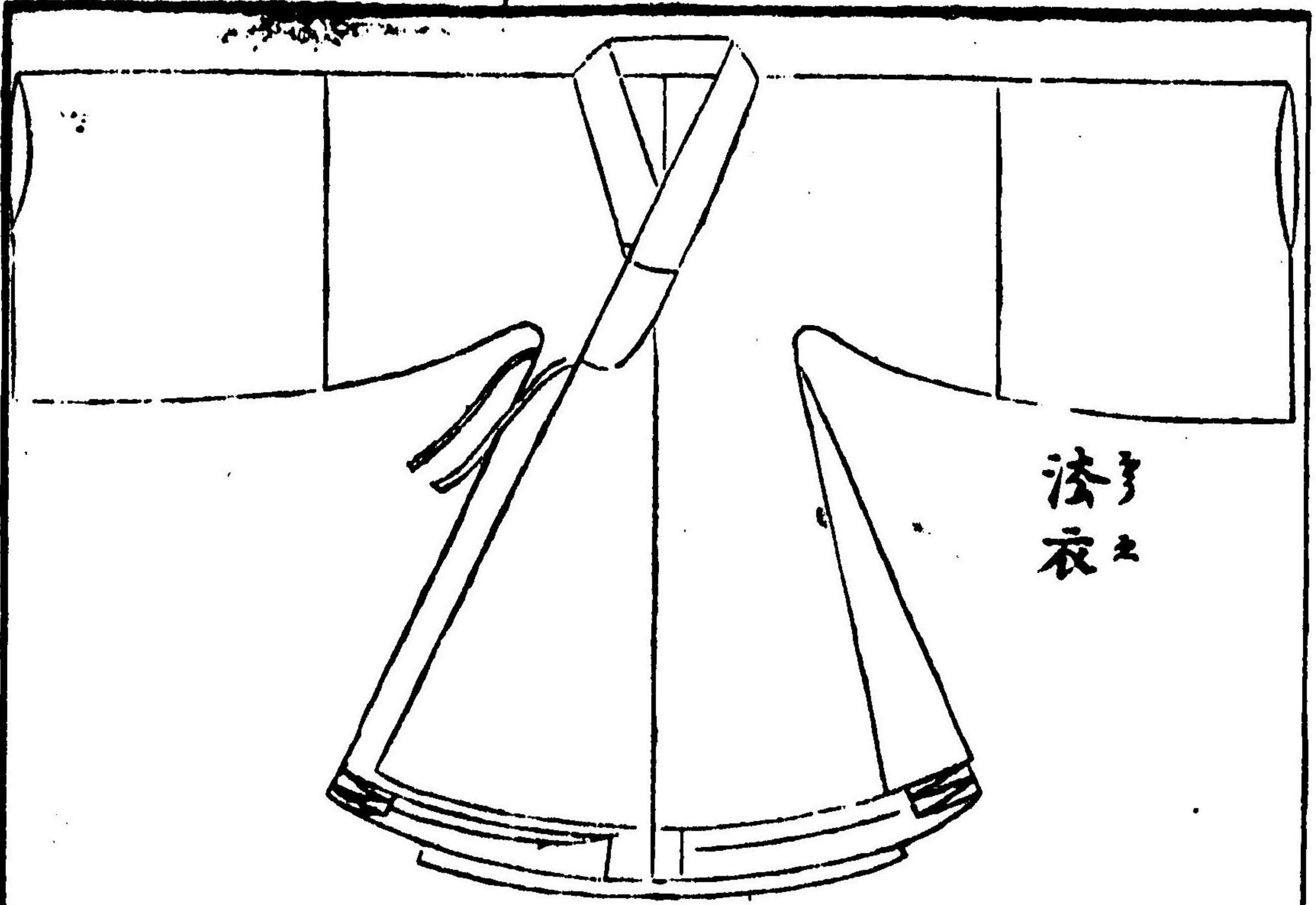
○在家の子を僧とあすまの度人み得ぬはた大寺の父母の大病をぞん
よそ子供成僧とあえと折振ま一或る母子の好むゆへ早く親み故と成と
家貧くして子供多く老る程命みして清きかつむゆ僧とぬらあは
とも惣領の僧とみ事成得ぬ二男以下たるまへま着をひく果寺み類
入ひ位持と見ゆひと子子の僧へ引受を師の子供み傳ふ利成せまふ
ぬら髪は法衣も惣髪か或る後角等みゆく髪かまふ一先選僧堂と云

取か出へま成習らせ回書五行成教人念經熟讀を十五歳み至る終く即ひた
あふふか時利度と若其肉試て業問み請きつ又ら出家成好む者ハ親を入選
すまもあつ終習ひ得る清ハ利成の吉見成定り任持を始寺中の僧強らば
幸堂の佛前出排班一式の如く誦経者若て右の新僧と成べき者成連ある佛
花みあつて頭髪を剃 師の僧法名成書件を傳拜と
其法名成度牒み書入新僧と成一法衣袈裟衣ホを着せりて世尊佛を拜
せぬ次は師の僧成拜と師の僧前時唱言成接け五戒三帰等の清規を教は度
大衆を拜請して佛成成選佛場入師の僧位持とあつて其日師の僧を今
日何某後利成と云し法位持入規式の通執行と云と法名あり一山の僧と通集あり
て式の如く執行ハ右規式止む一山の僧徒寺内みあつて杖の徳成應寺あり親み
よそハ袈裟長成を物索新花の物身み懸し師の僧みたふ選佛場み

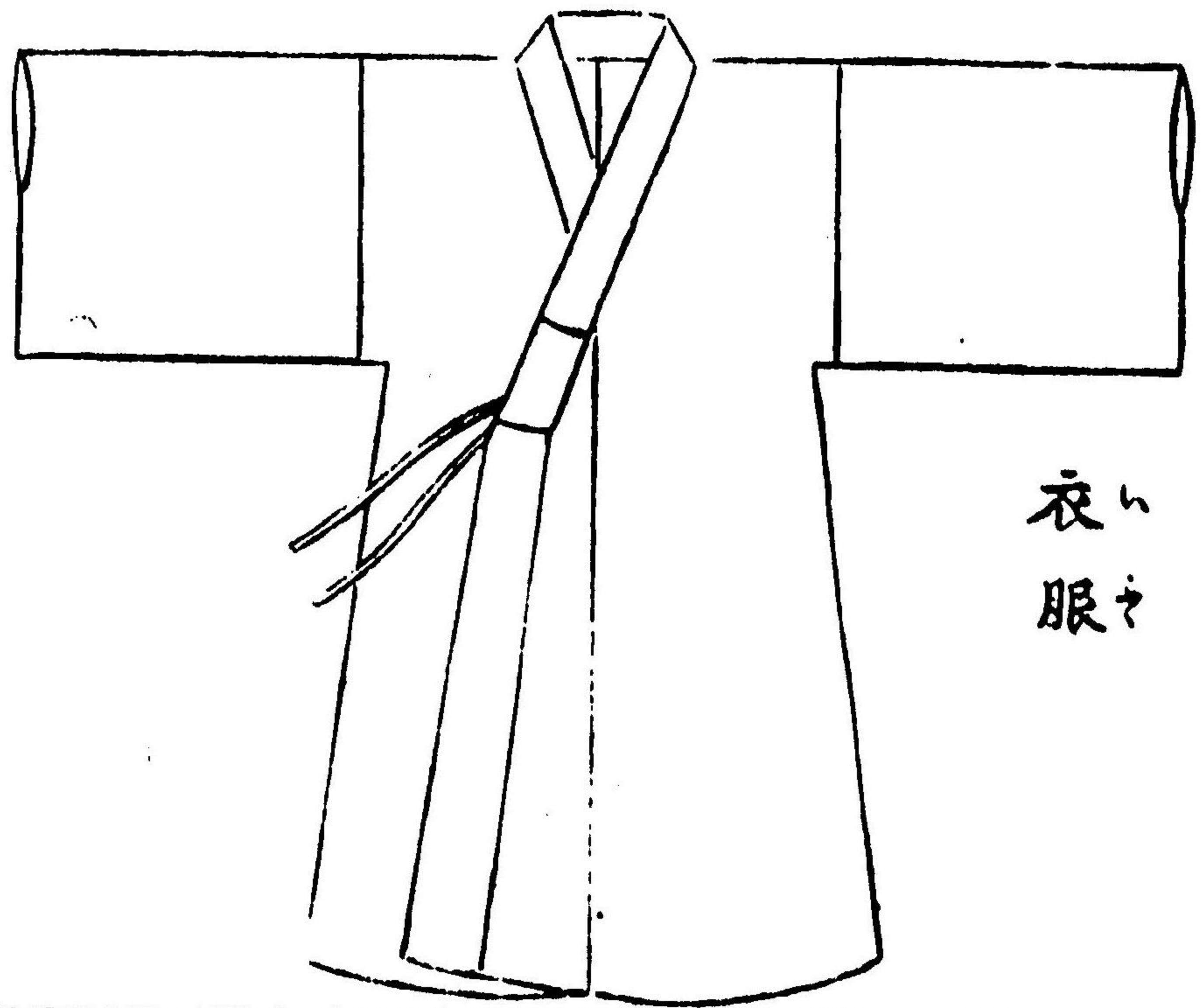


袈裟けさ

座具ざぐ



法衣ほふえ



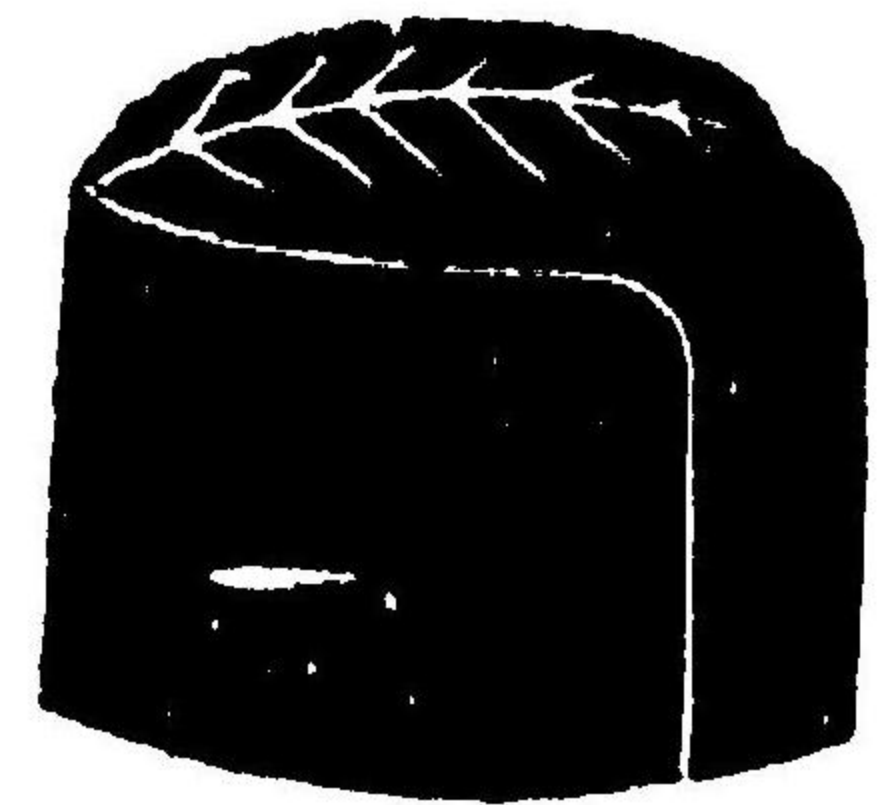
衣服いふく



總角すんかく

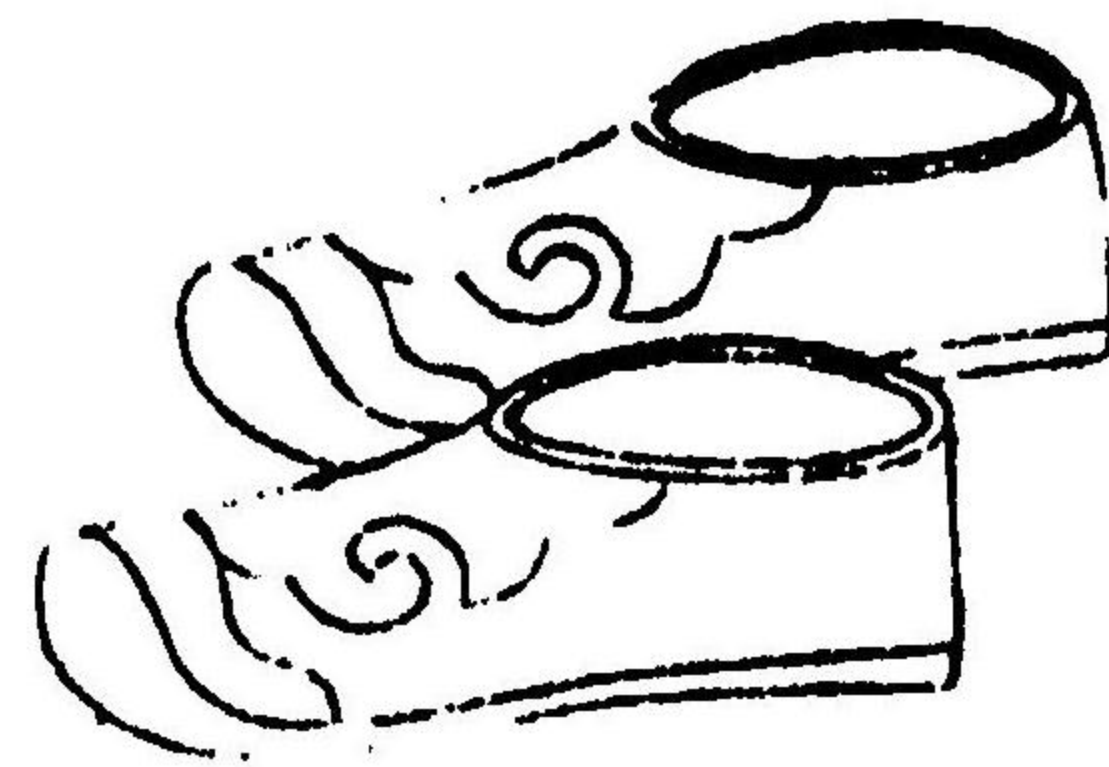


前面ぜんめん



横よこ

帽子ぼうし



白糸しろいと

紅綴べにづい

僧鞋そうげ



誌公巾しこうきん

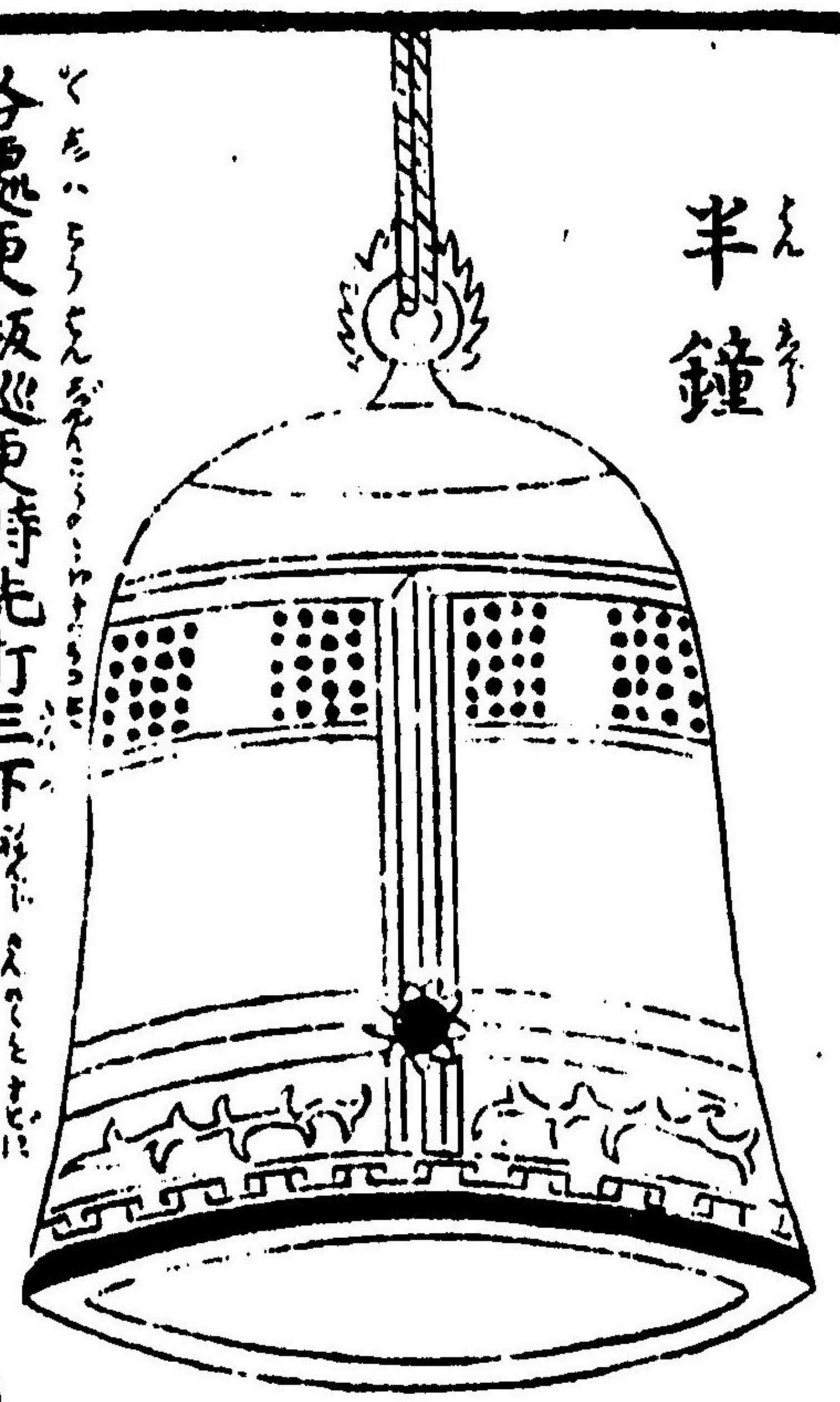
小沙彌



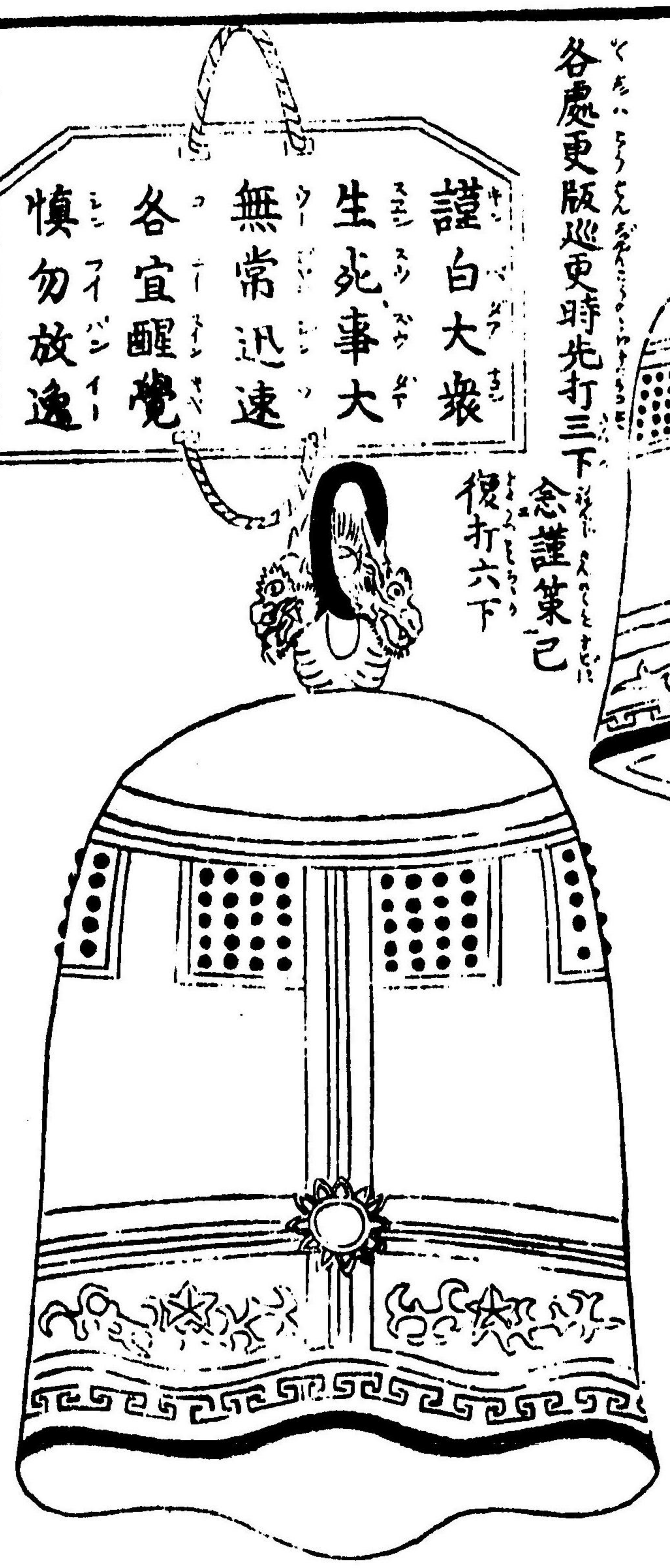
座禪回念佛經等の勤學をせしむる内の小沙彌小沙彌は、諸事諸事に
 予はかゝる○月勤めを巡照とて、夜不夜を勤め、夜中木魚を敲き
 無常迅速一心念佛南無阿彌陀佛と、定寺中夜巡り二更毎に本堂にこゝに
 禪堂掛たる更版とて板を叩き、此及び其書とて、又を寫す、其諸事諸事に
 五更の更版を叩けば、鐘司鼓とて、役僧鐘樓鼓棹を登り、鐘を撞く、大鼓をおか
 其内内殿司殿司の役僧、又燈明を照し、香花を供し、打掃潔淨をせしむ、又、鐘を
 亦半鐘を聞く、首座以下、寺中の僧徒らに、本堂に集り、禪堂始り、大衆の内内に
 一人、大木魚一人、銅磬を鳴し、年忌僧とて、小磬、小鏡、鉦を敲き、鳴し、禪堂の内
 住持提燈を持、佛殿並に皇帝の龍牌、及靈廟、其外諸佛、拈香し、方丈方丈へ帰る
 明方明方に補經補經をせしむ、其の際、入典座入典座の役僧、齋堂齋堂の茶茶を飯、柳柳とて、魚の形魚の形に推
 ぶ、掛る掛る、又、叩き、又雲版雲版とて、物物を叩けば、住持住持始り、首座以下、僧徒の傳傳

寮の僧引磬を打齊堂小集ると後には禪經一戒尚成吃一平してえの
寮か入座禪修學か修めり又托鉢かあもあつて昼七時めり午堂か掛
るか半鐘を叩け朝のあつて諸僧集りて禪經の夜一更めり鐘樓の大鐘
太鼓を打 二更の更版を聞く座禪を止め休息の
佛供物と毎朝茶点の飯の初徳成供し朝日十五日の菓子野菜類四時
迄供ふ事定式あり 法會執行の時ハ多少むかひか
昼夜寺院の鐘と朝七時昼七時夜五時此三度より外時刻を告ぐ事あり
出世成志は僧り遊方僧とて諸國を巡り知識を尋ね其寺に掛錫し重り
座禪回答成修を此向か行者とて修行進と悟りて道を開け其種
知識を正め師と行と先師の事を受業師と唱ふ行者の間と中切の有參り
修行専あり此行者の内より多く名僧出ふよりあり

半鐘

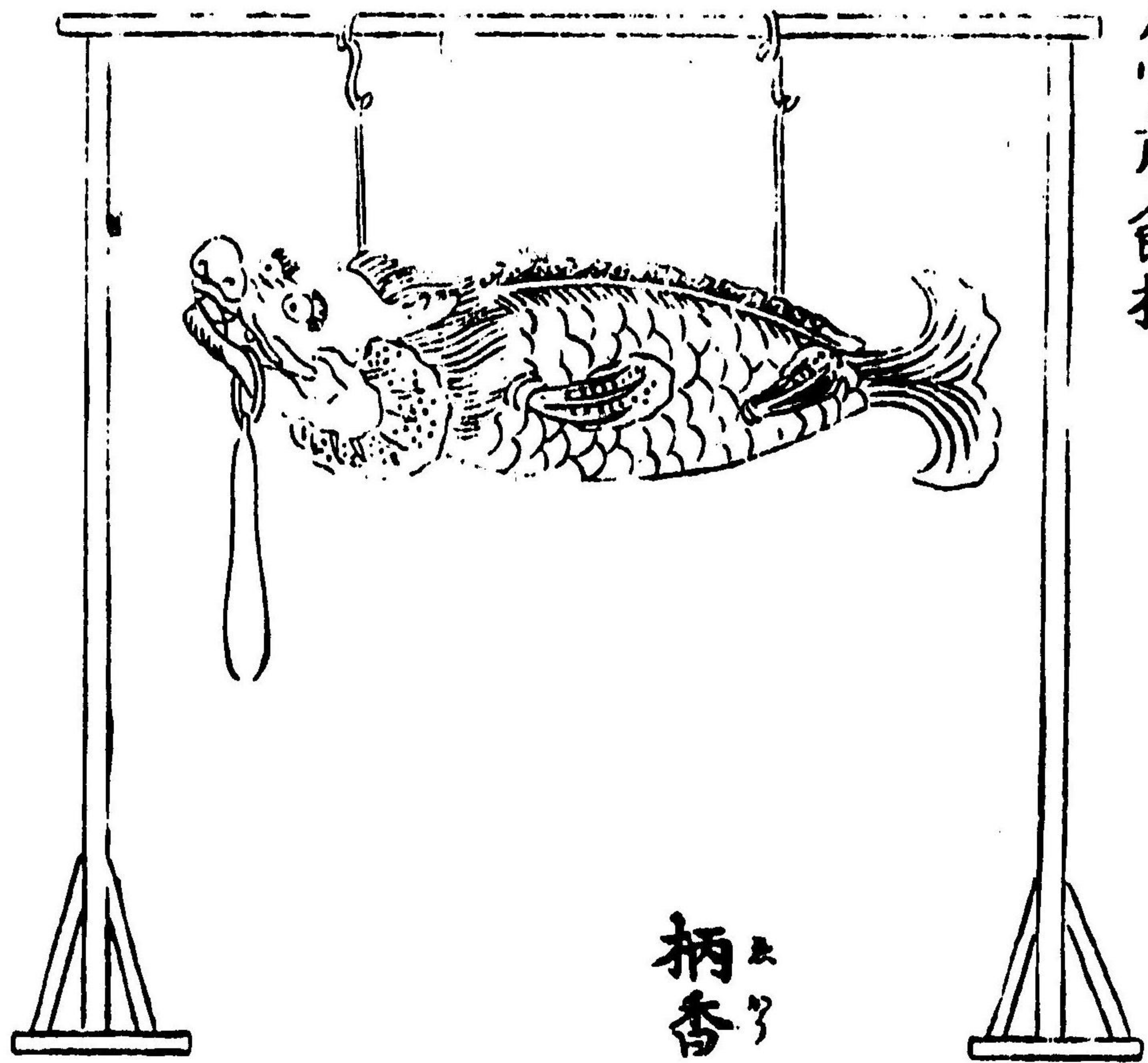


大鐘



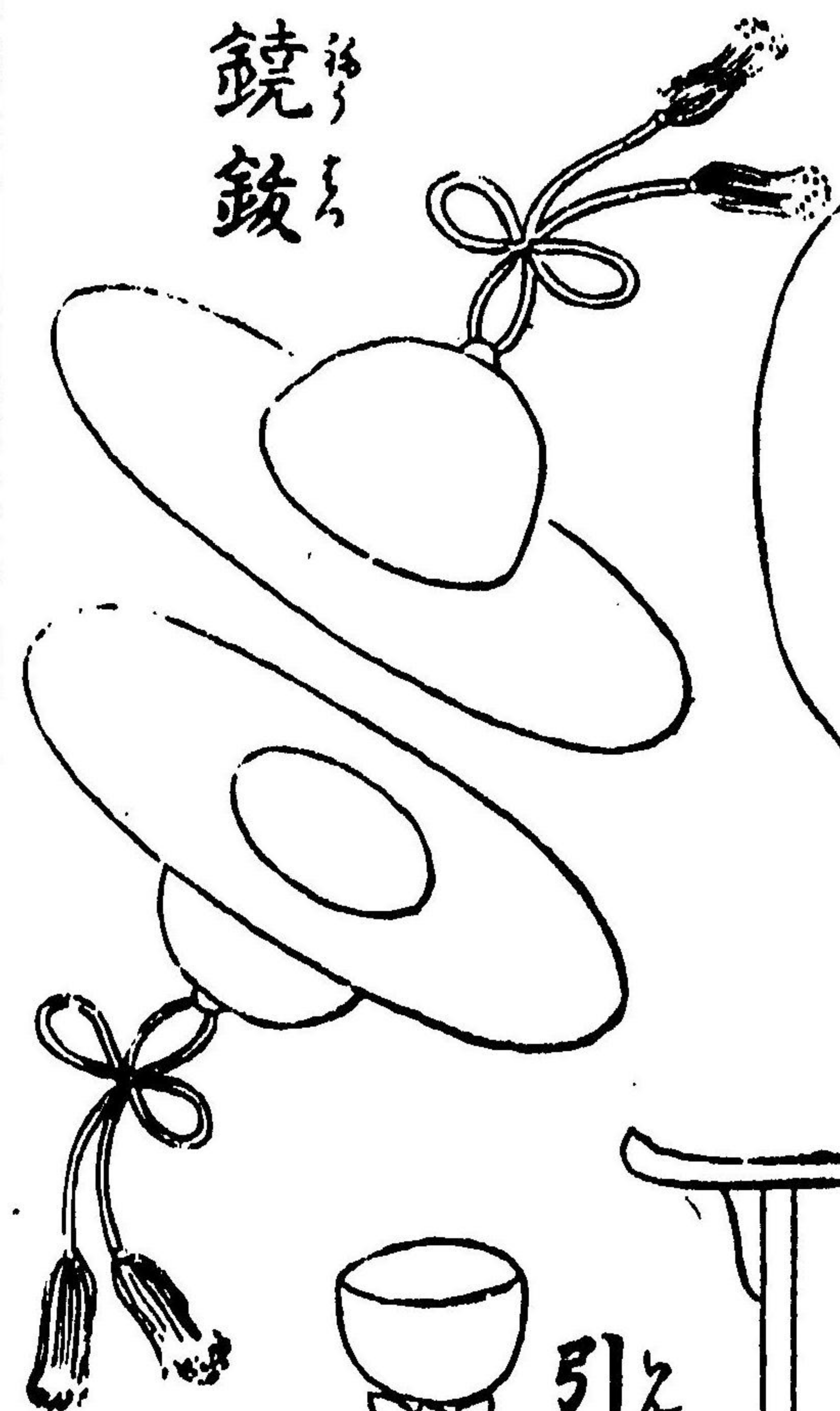
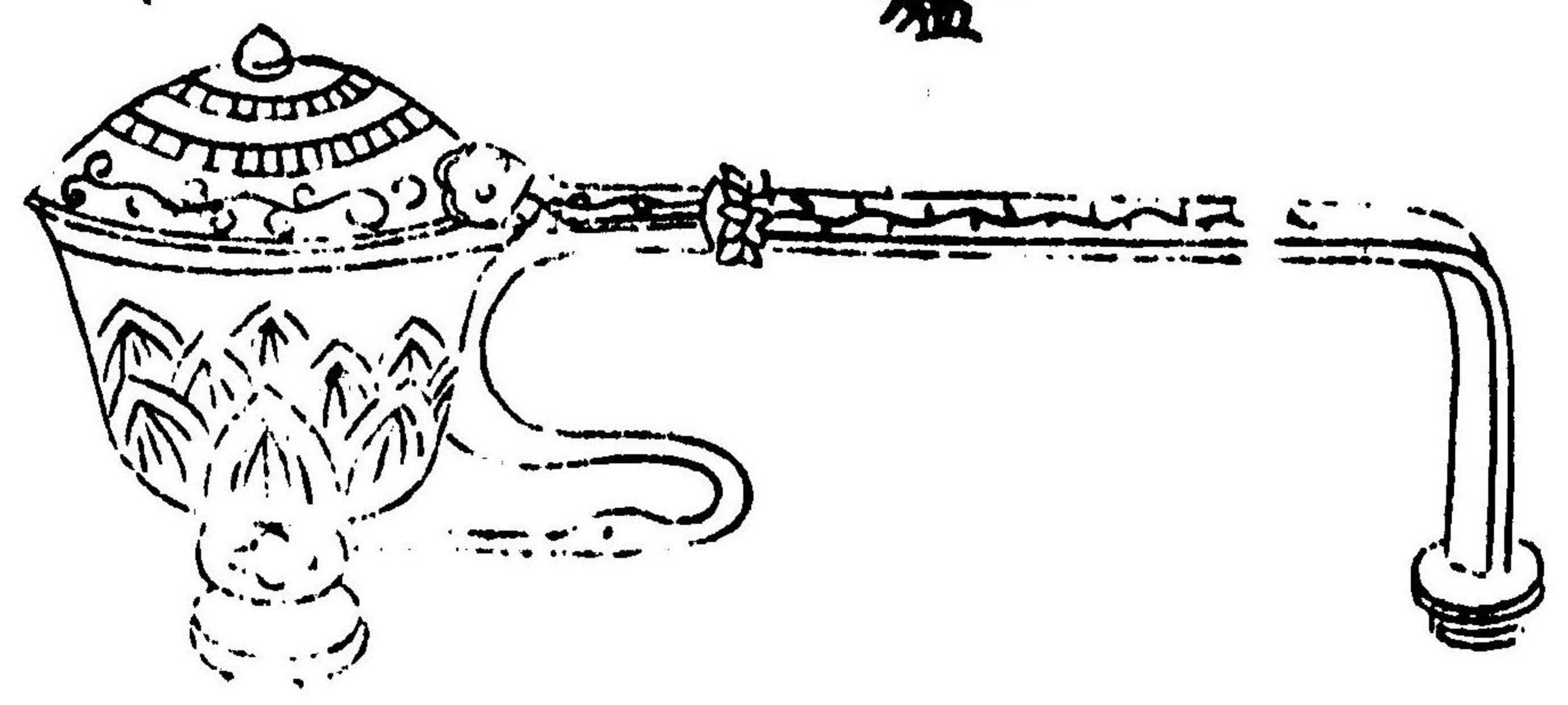
各處更版巡更時先打三下
念謹策已
復打六下

謹白大衆
生死事大
無常迅速
各宜醒覺
慎勿放逸



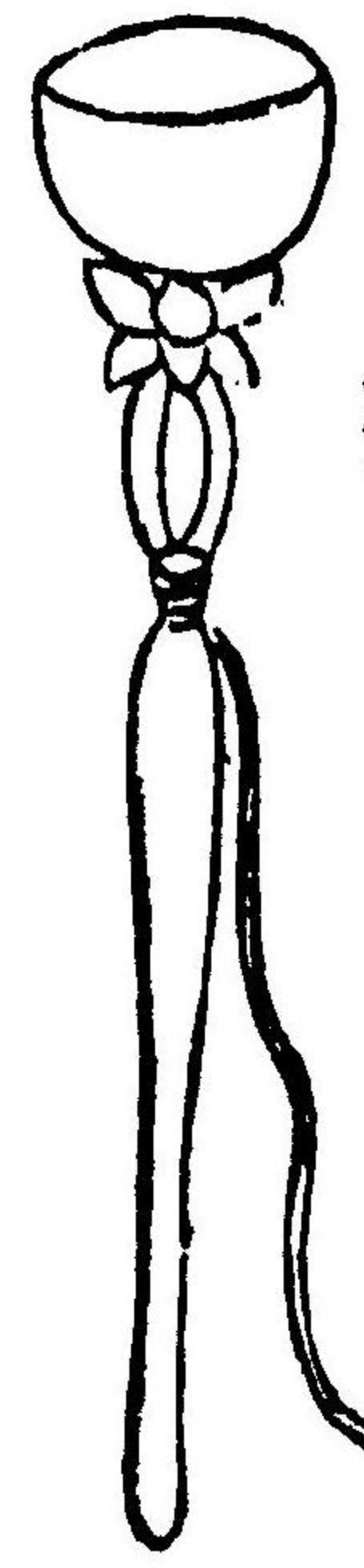
齋堂前飯柳

柄香爐

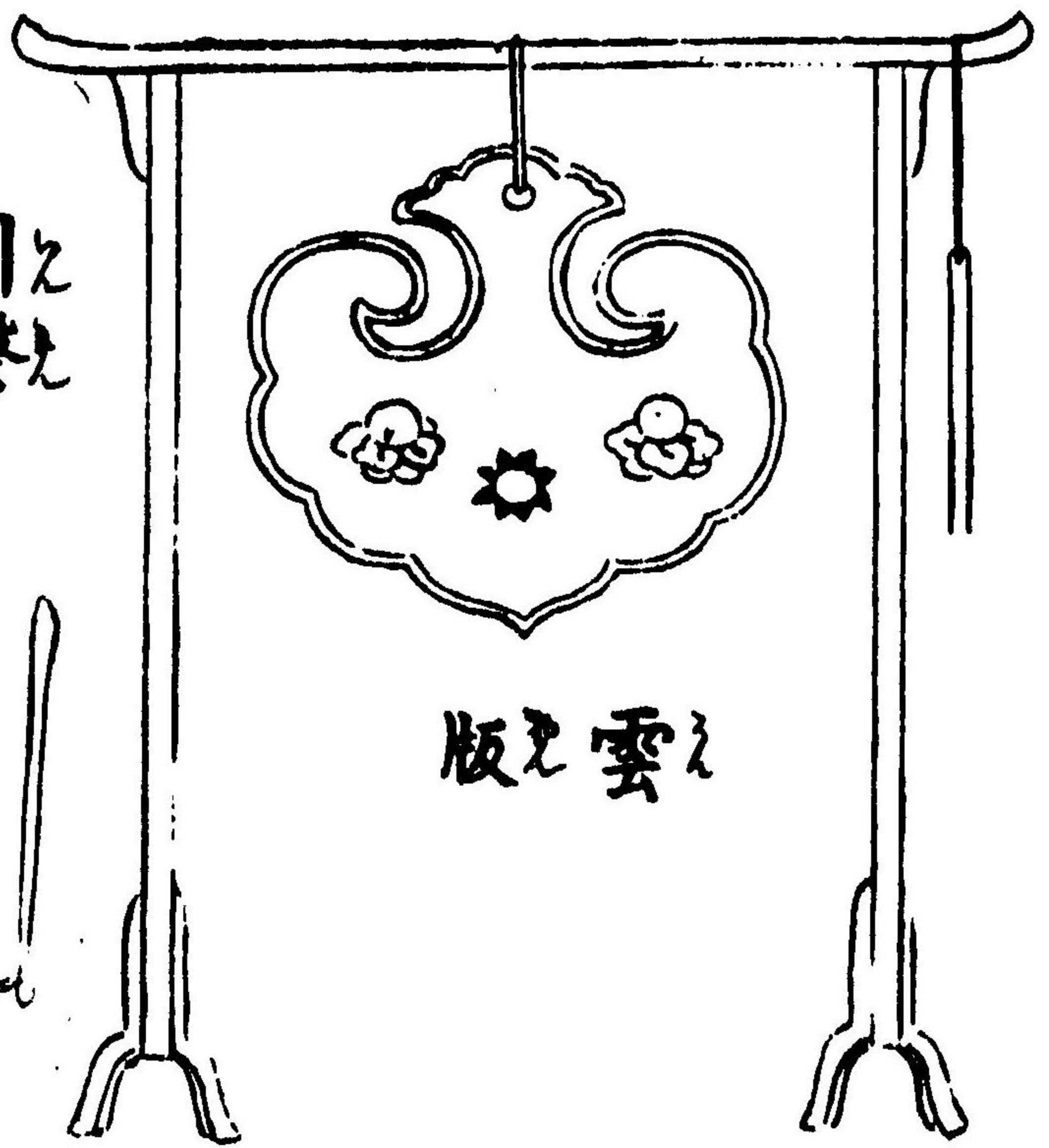
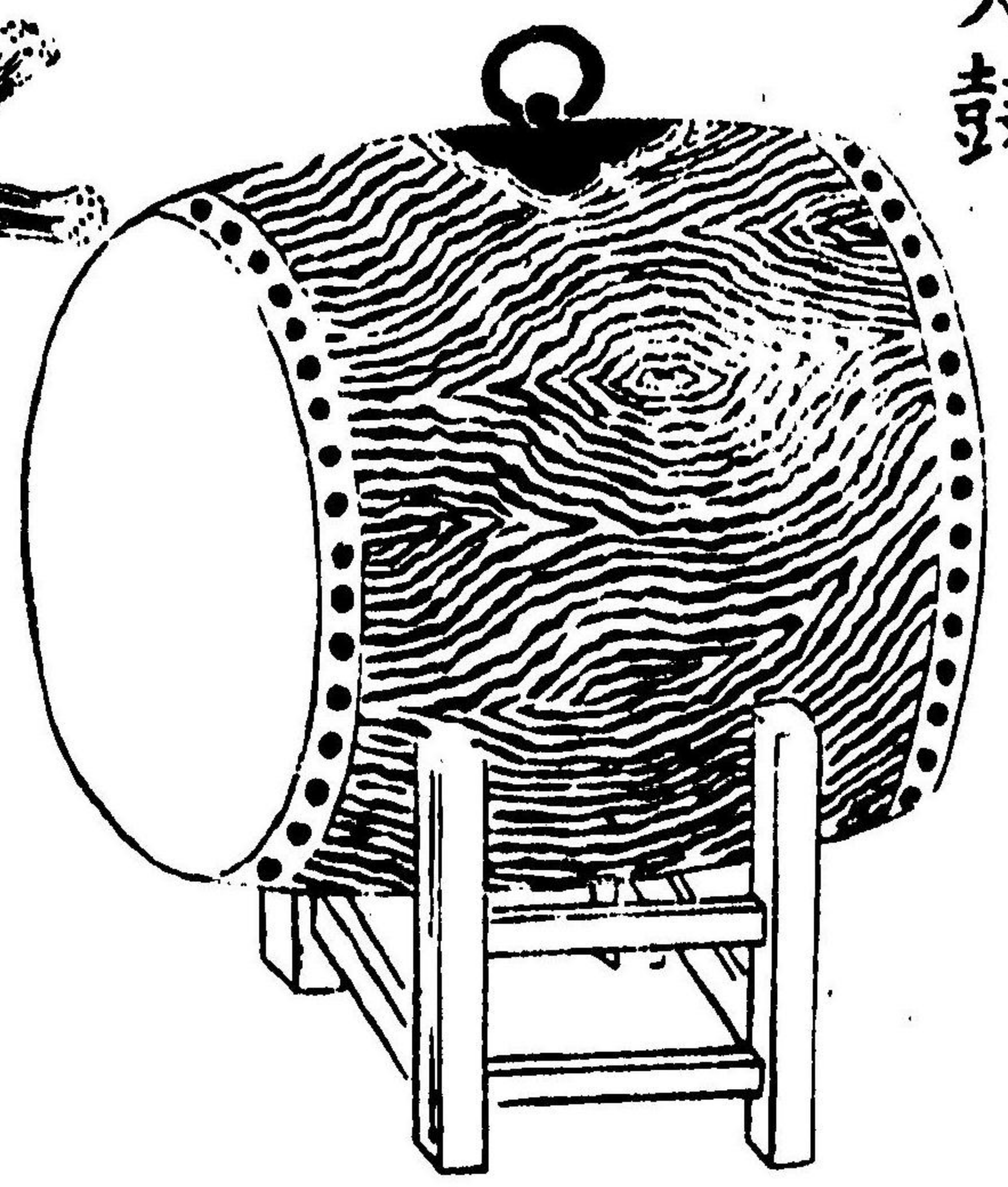


鏡
鉦

引之
磬



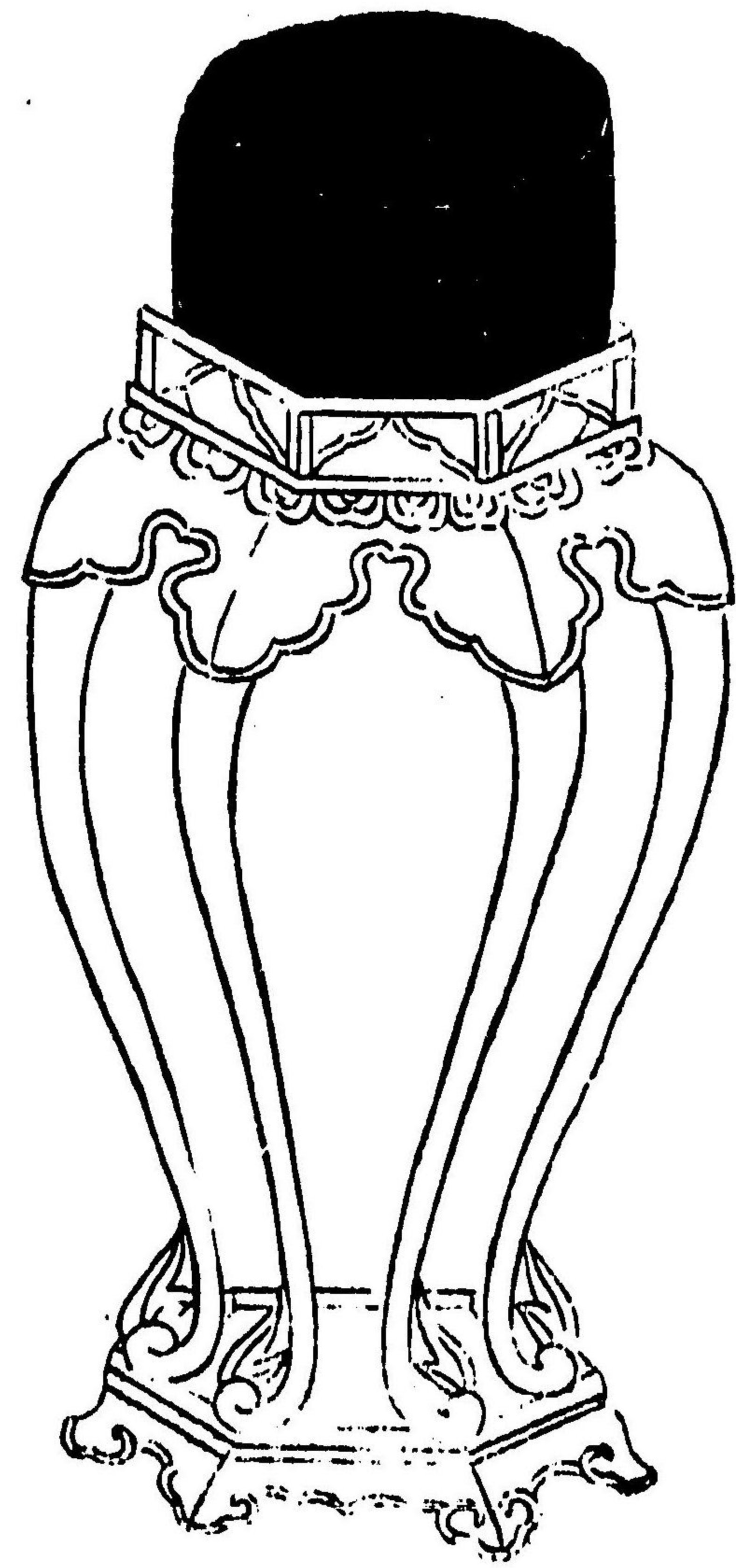
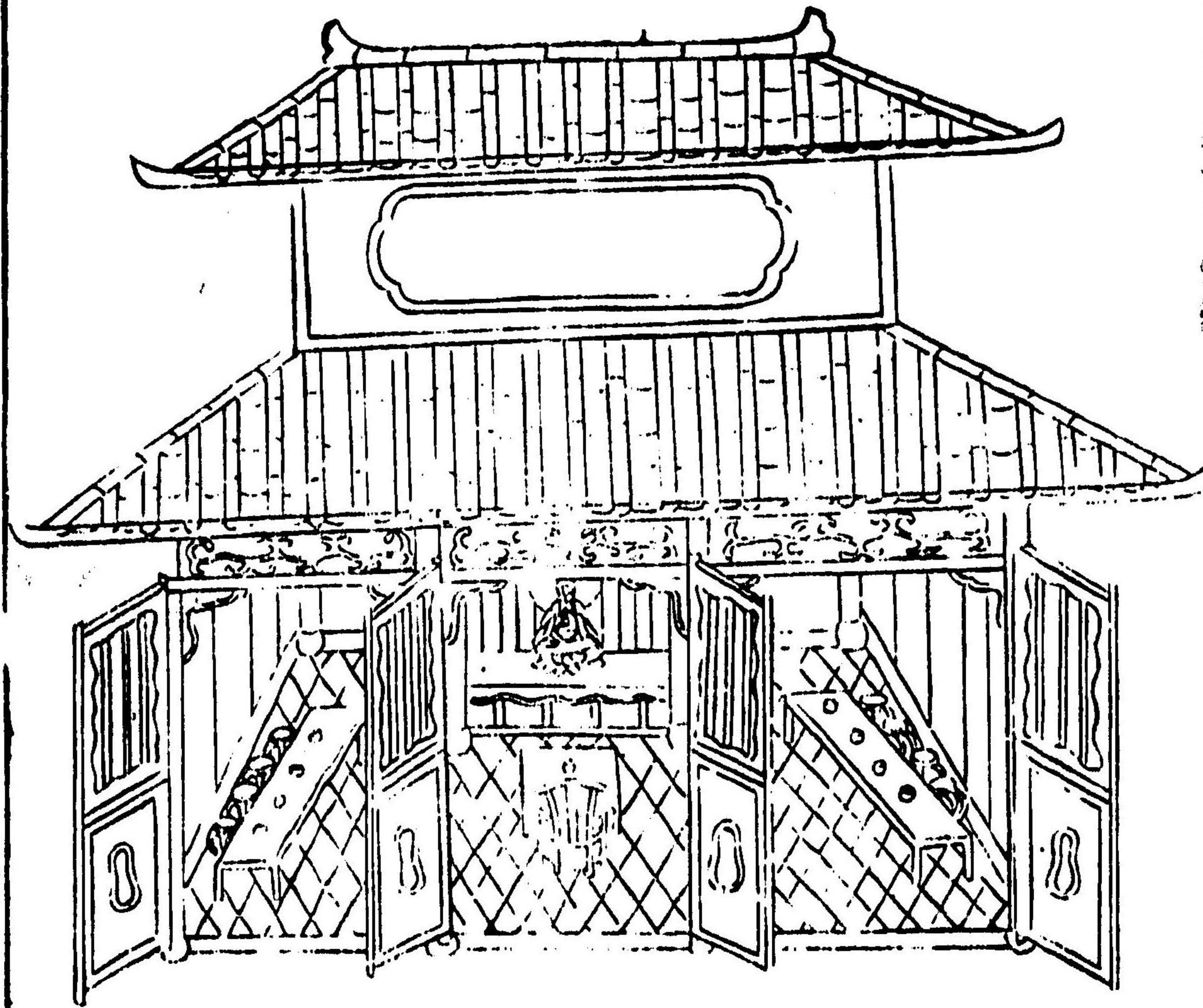
大鼓



版之雲

齋堂吃齋

銅磬



齋堂

廿

遊方僧



○托鉢小僧の肉喝食と云者あり是と云儀其外施行の物は何れも皆
とらへつゝ せうがく とうりやうとん

取收め席寺の上まゝゆね認り差配と云は僧あり托鉢小僧と云僧
とらへ せうがく とうりやうとん

用事あり又の寺小非常の事ある時大鐘を撞けり外出の僧徒
とらへ せうがく とうりやうとん

○檀越より先祖の事因は外法會あり僧侶を招く其施主より
とらへ せうがく とうりやうとん

又の供を忍く積もあり供養日数二日の間誦経あり
とらへ せうがく とうりやうとん

の求めの用く焰口施餓鬼水懺等の件事執行も重なる僧
とらへ せうがく とうりやうとん

と主人門前まで出迎ひ互小往儀を述願堂へ請へ
とらへ せうがく とうりやうとん

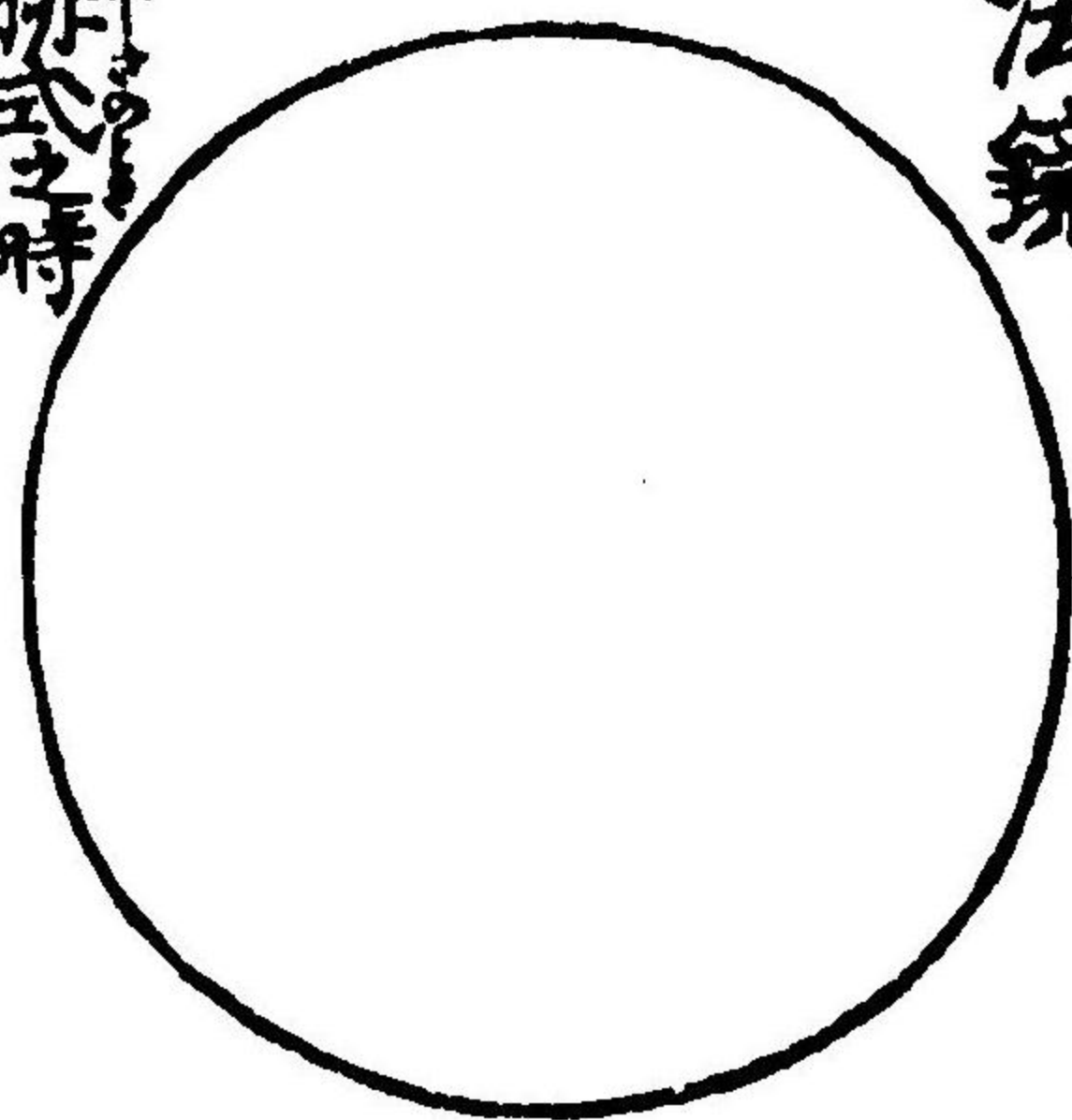
案内一靈茶めく拈香誦経は法事年々布施ありて一日小僧一人
とらへ せうがく とうりやうとん

鎌百又百五十又住持長老を銀十文程送る足所職資と云を
とらへ せうがく とうりやうとん

用く等かゝる○焰口施餓鬼執行の時坊唐尼石新小佛座
とらへ せうがく とうりやうとん

志は二霊の神主牌を五燈改懸し錫五事を傍に
とらへ せうがく とうりやうとん

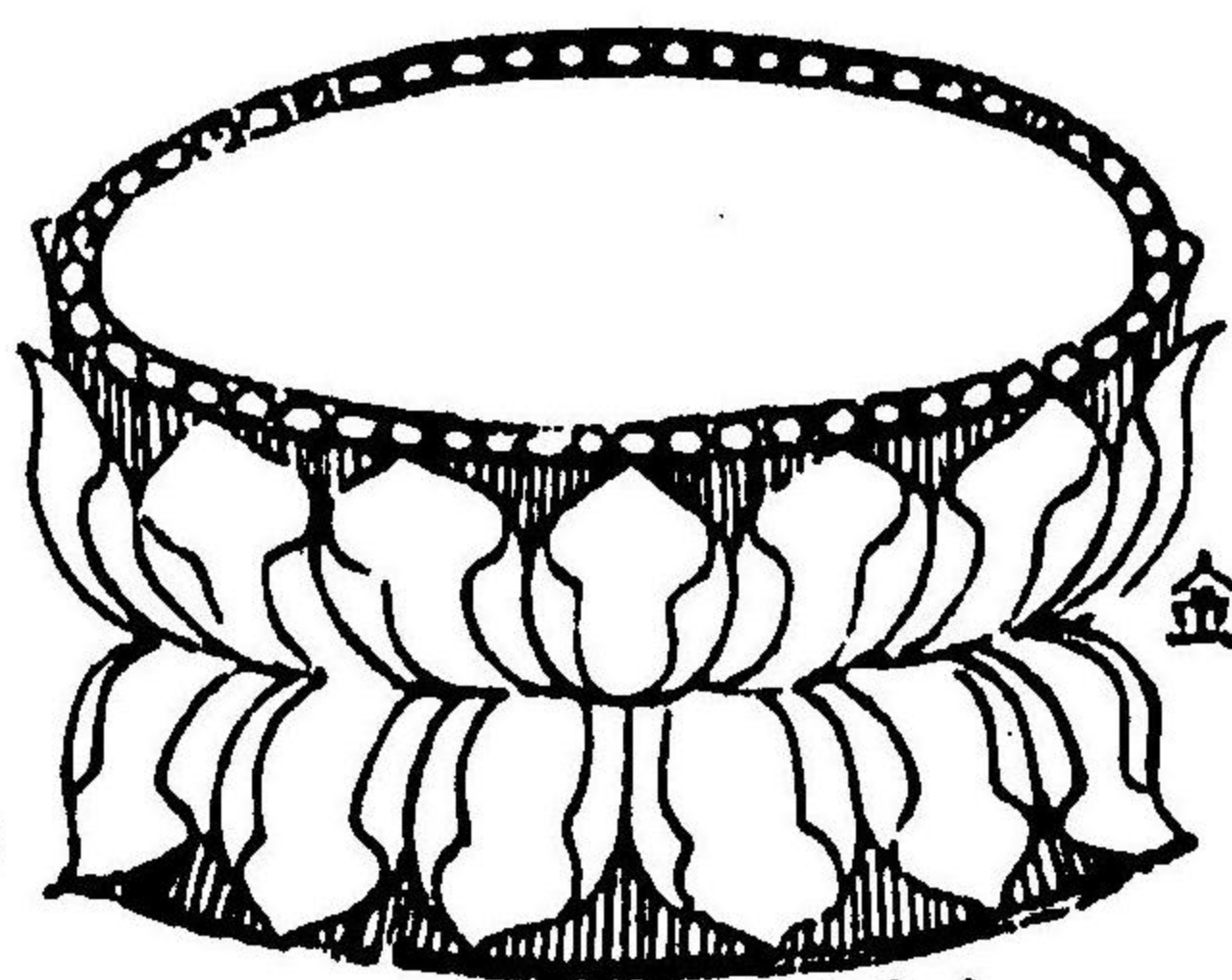
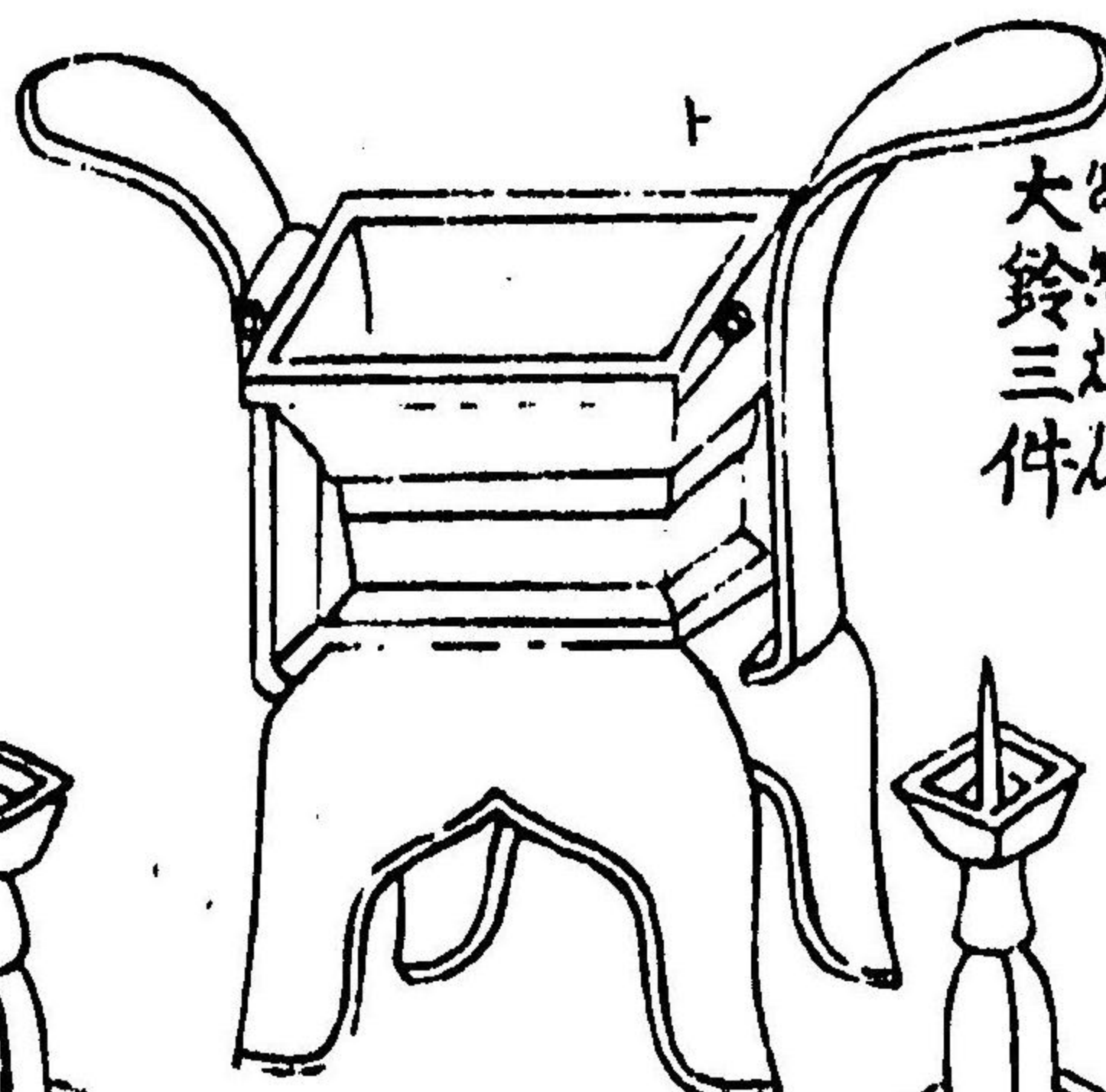
法鏡



排式之時

鏡面朝天置置上刻金剛杵寶錯

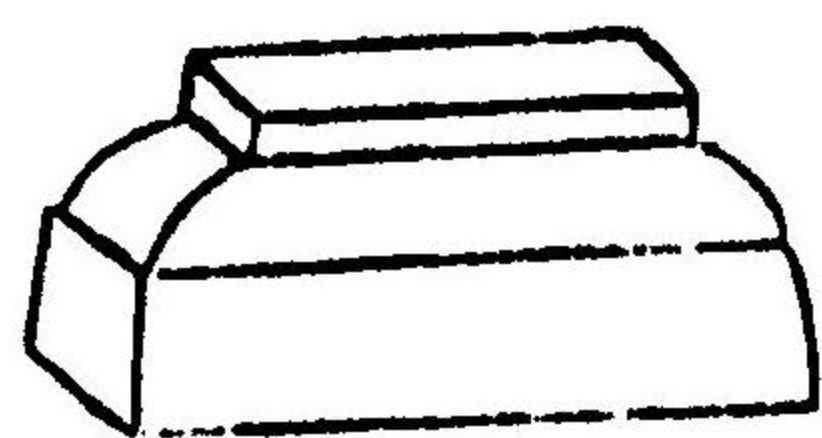
大鈴三件



金

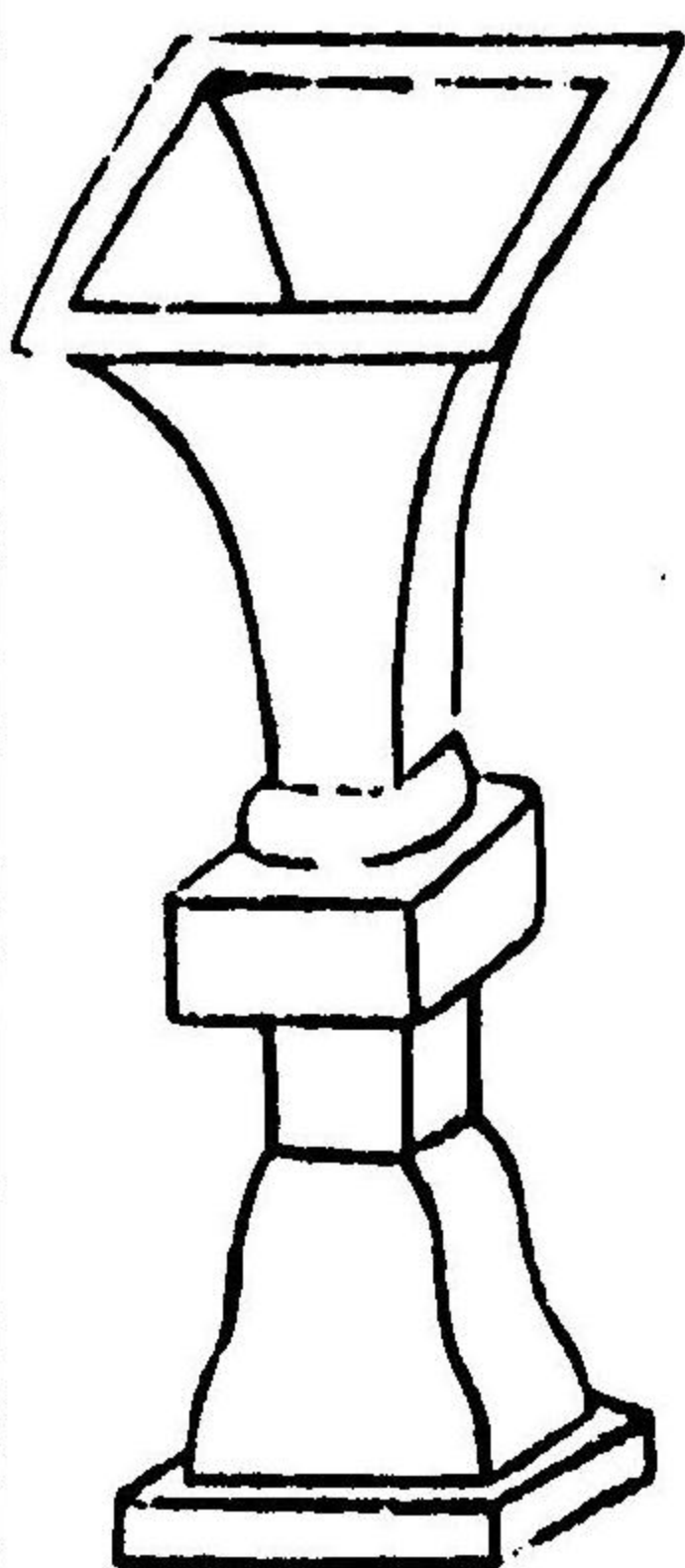
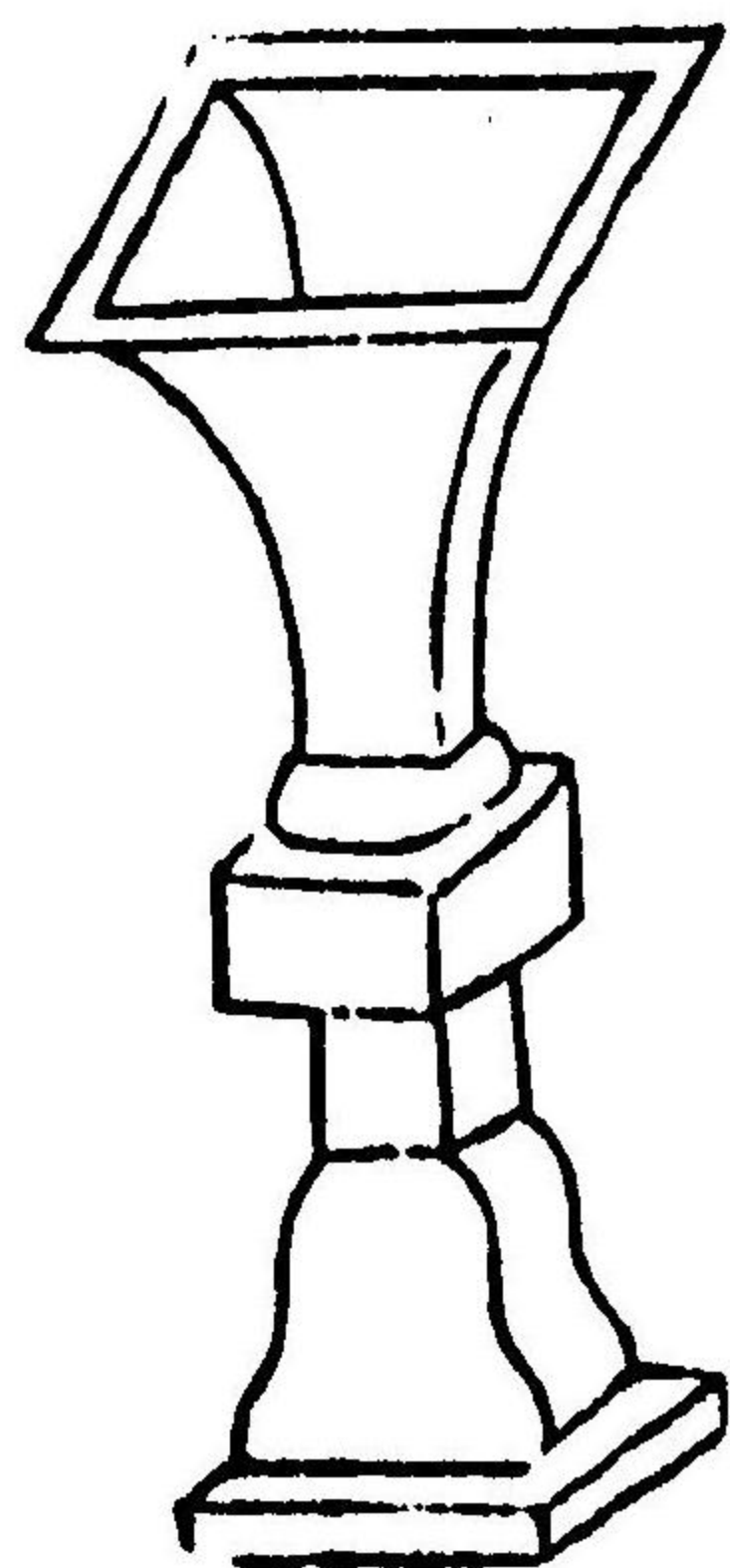
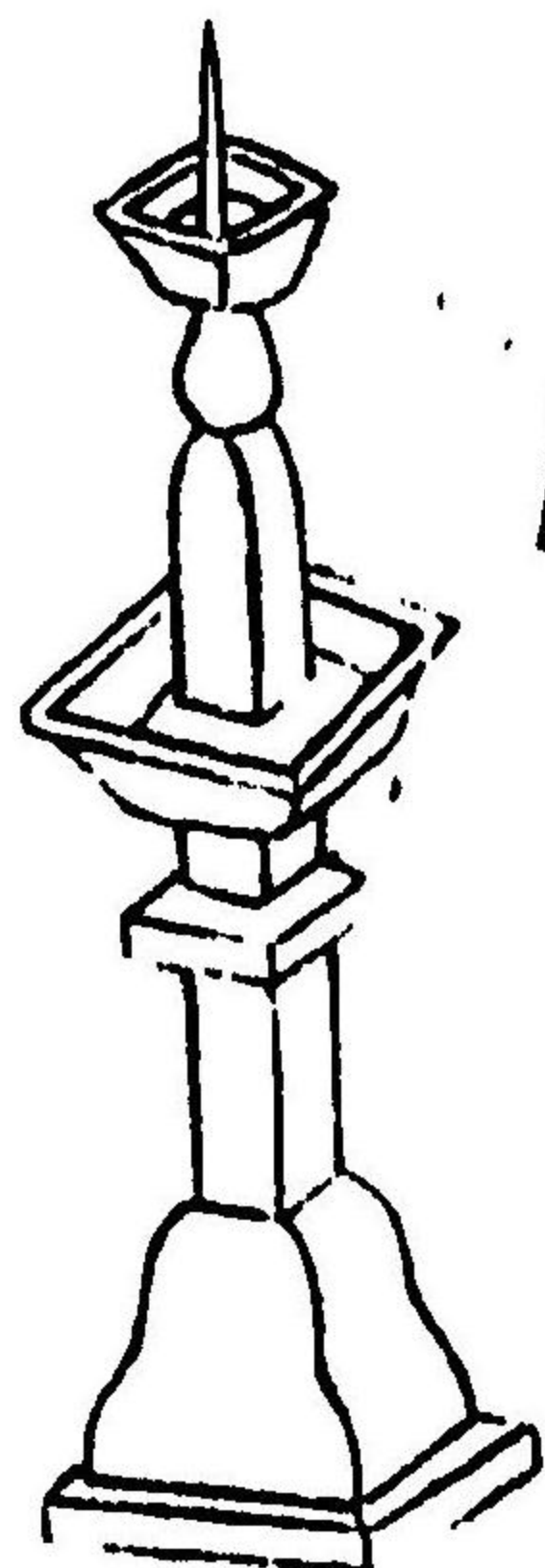
更架
法臺

法尺



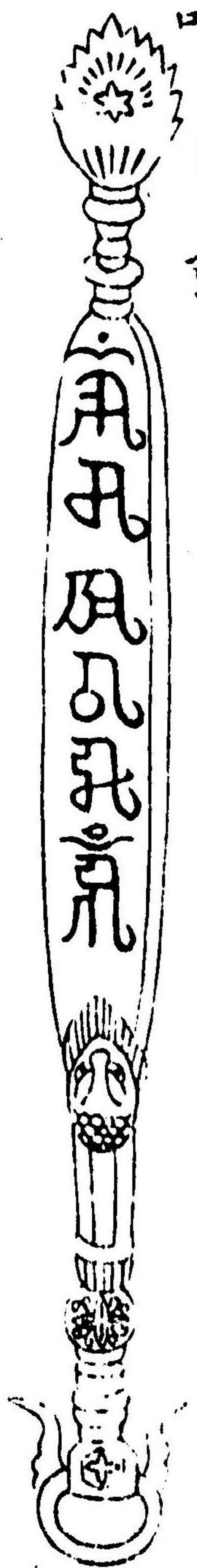
排式之時
中座經典之右

錫五事
和名五具足



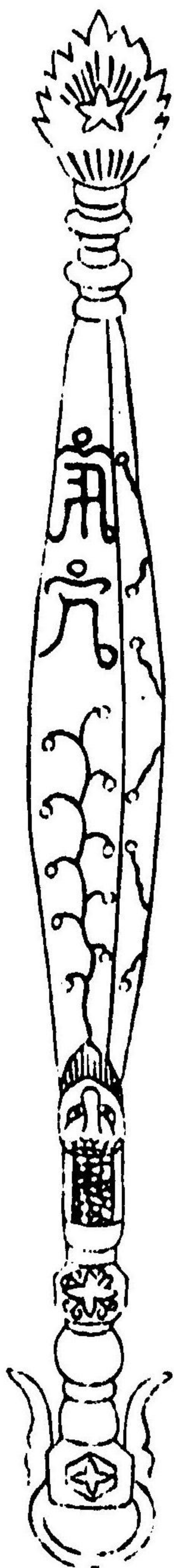
寶錯

片樣式

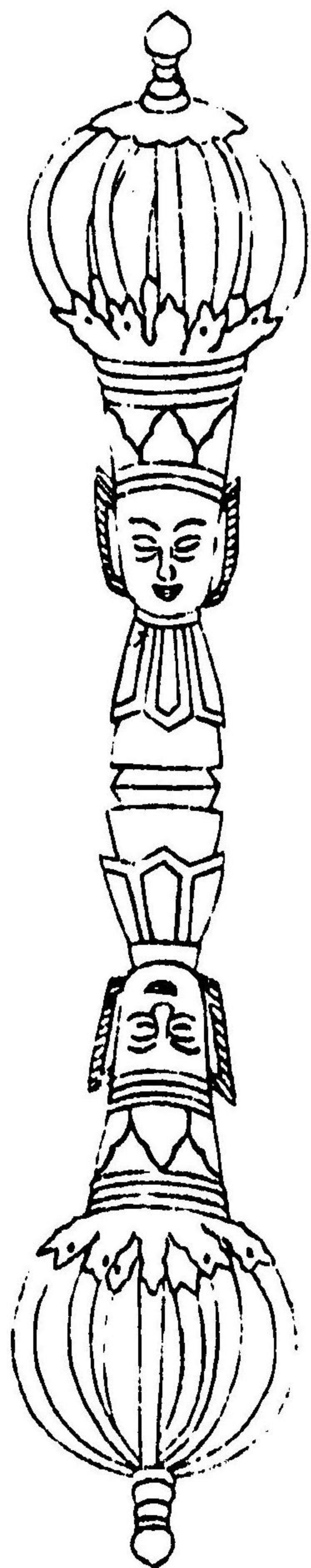


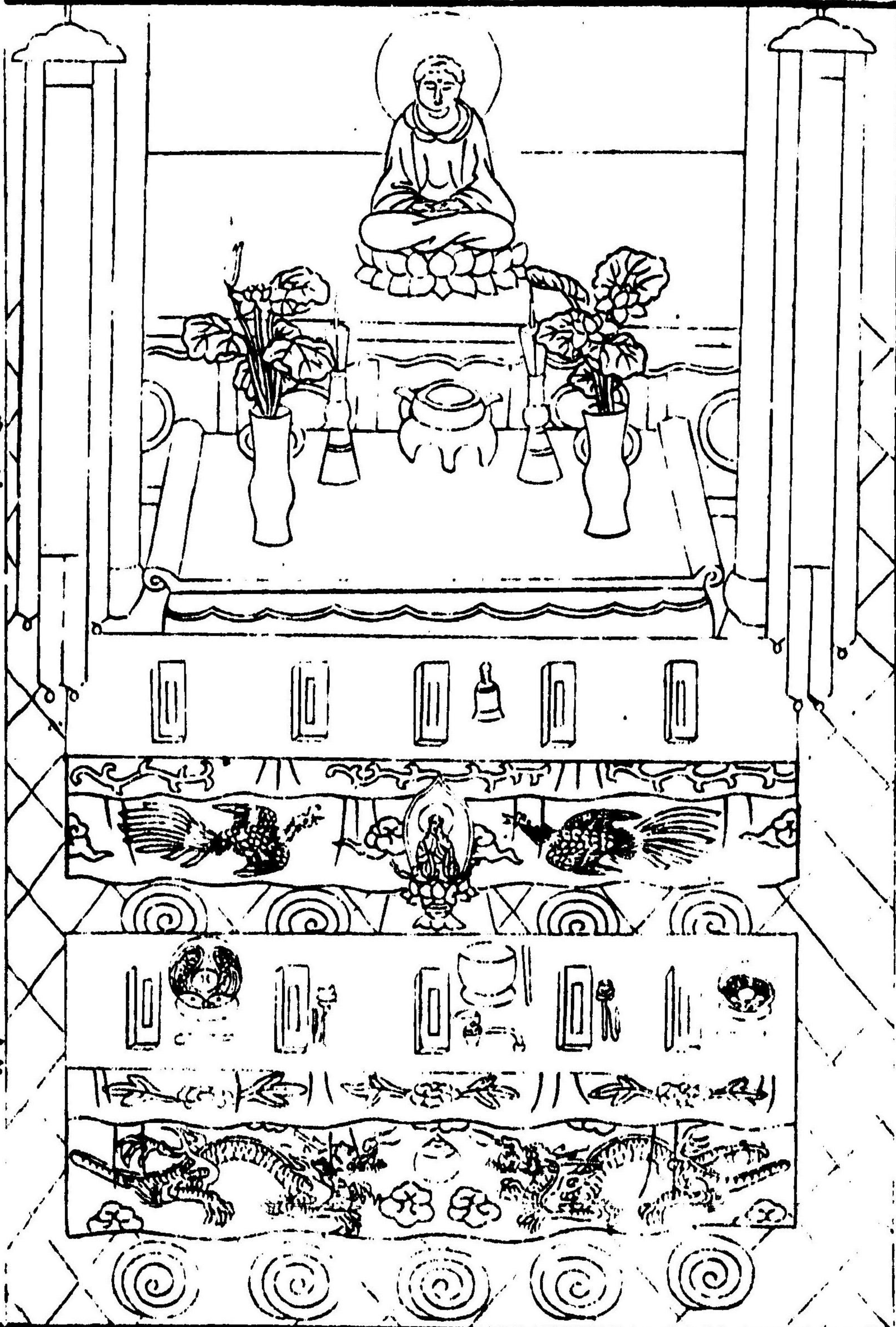
同

方樣式



金剛降魔杵





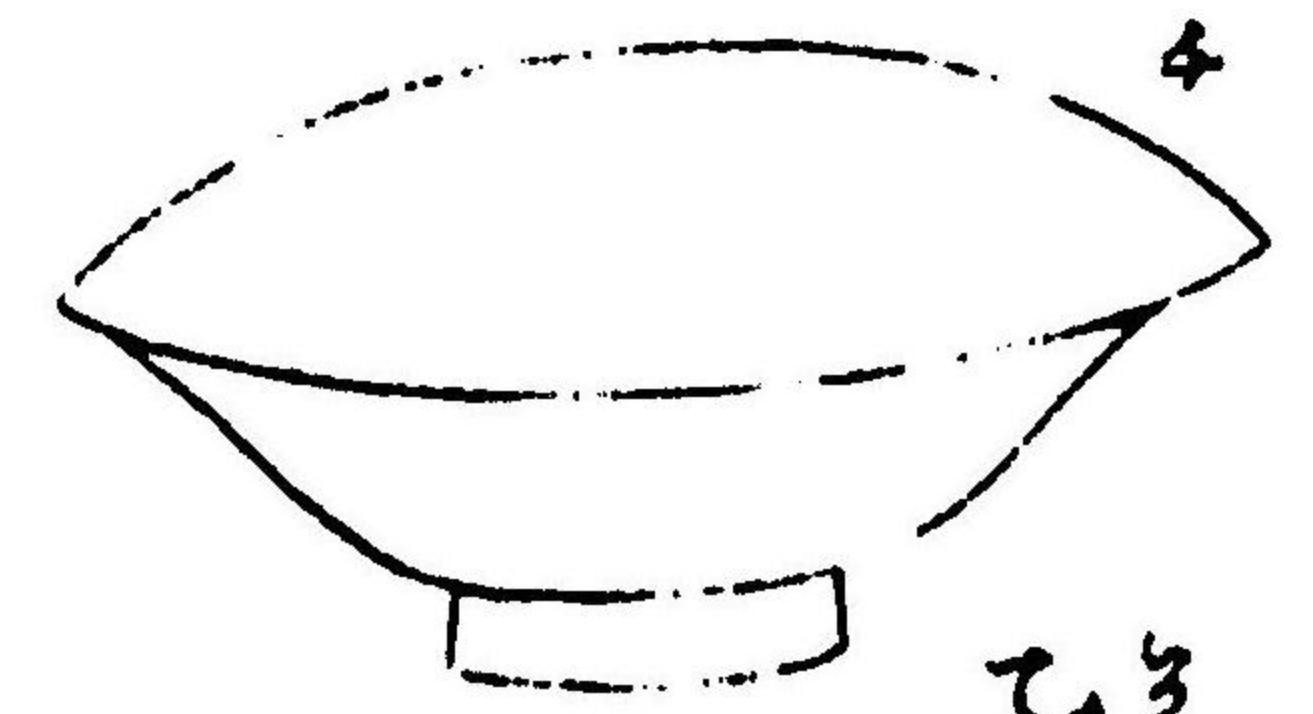
水獻排式之圖

中尊佛觀世音

僧衆

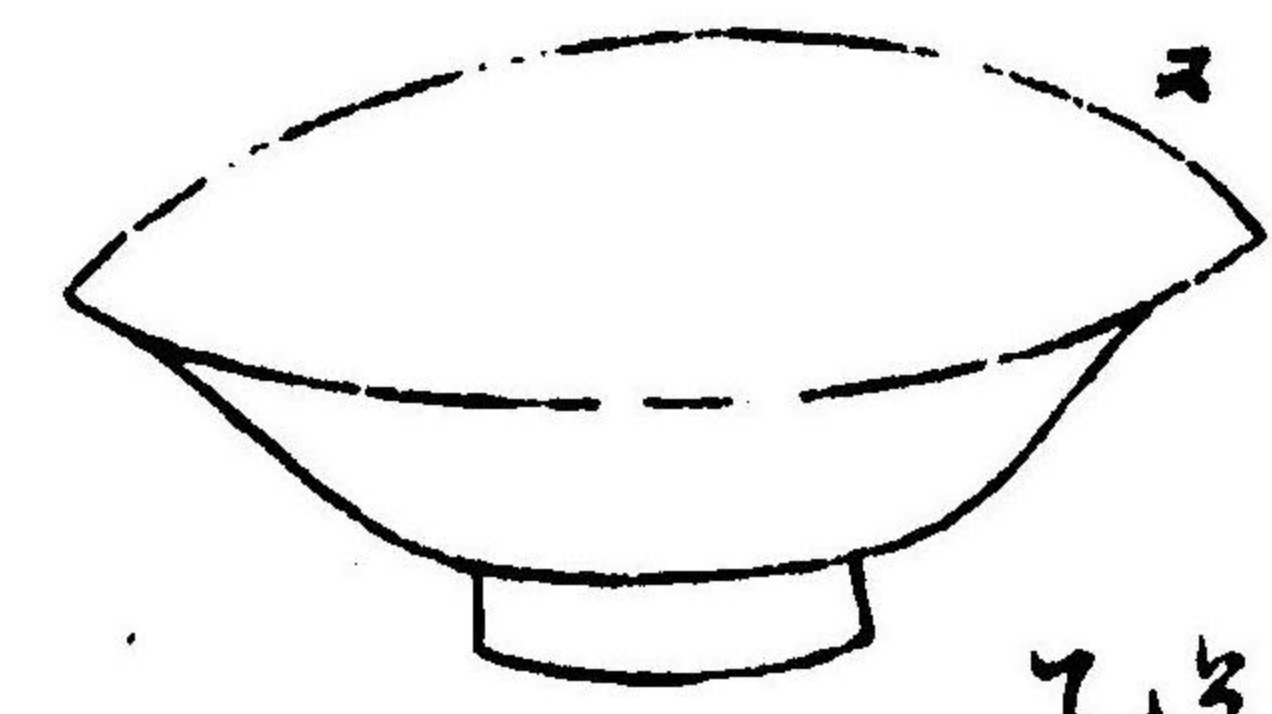
十六

花米鉢



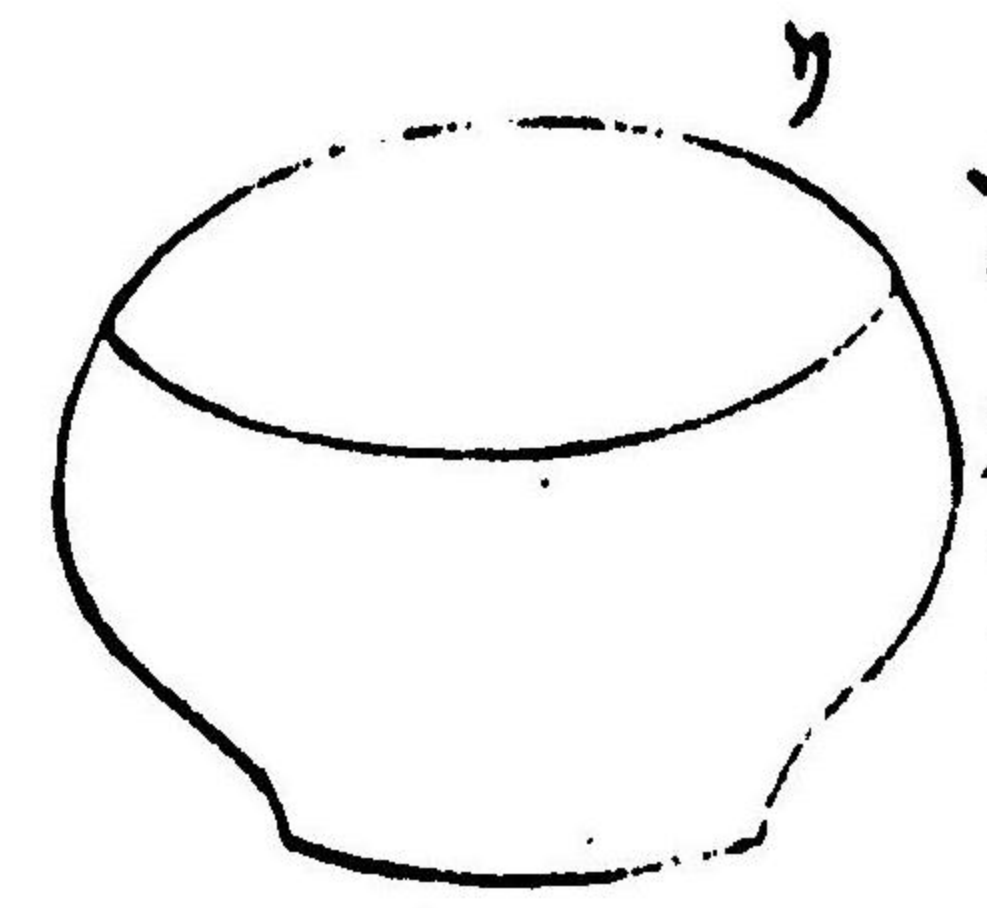
乙 盛鉢頭

全



乙 盛花米

洒水器

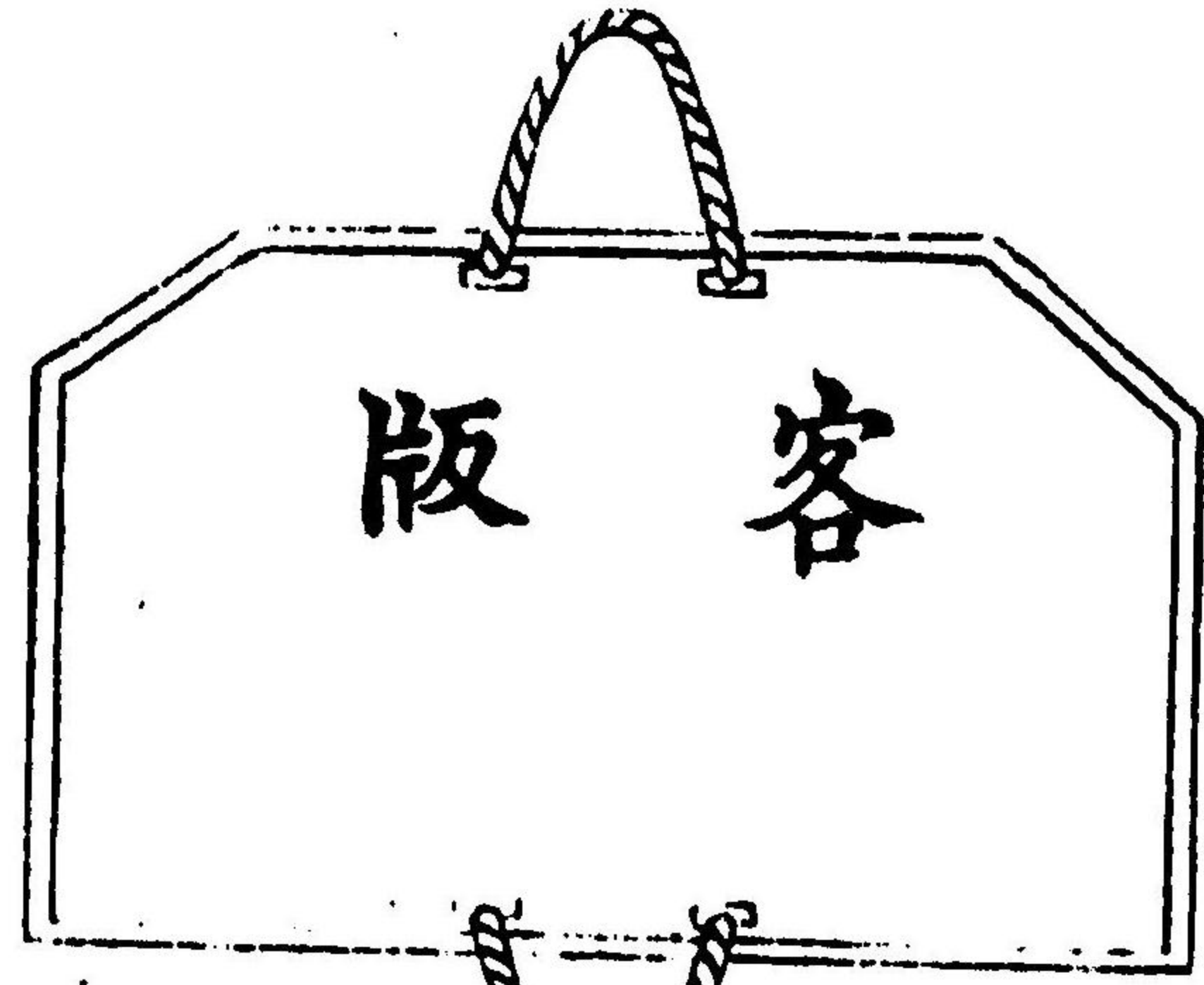
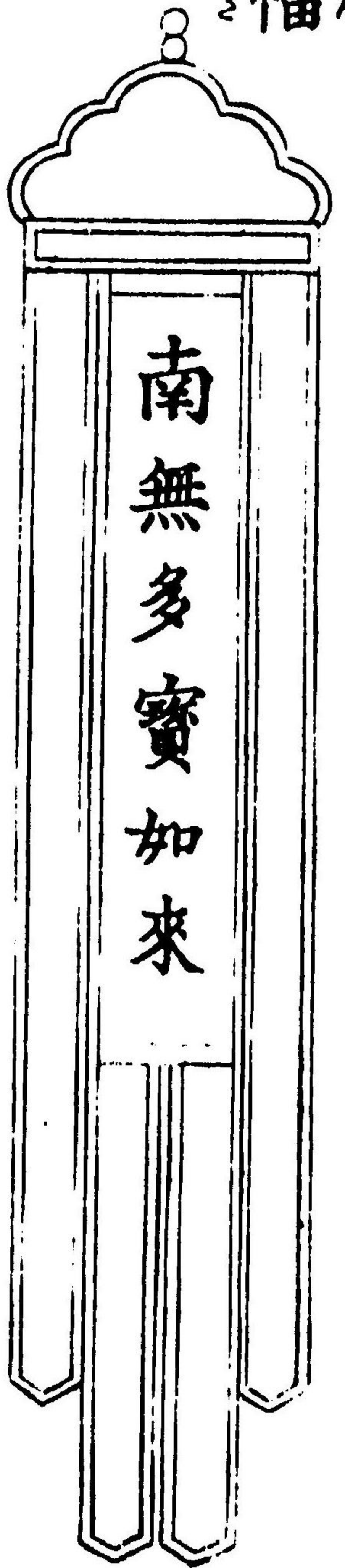


甘露瓶



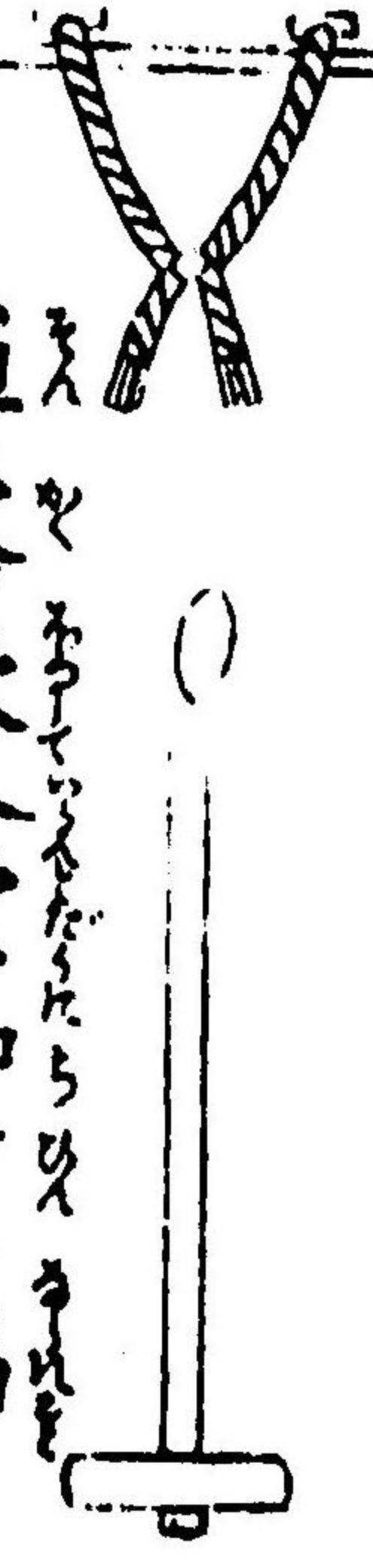
排式之時 挿柳枝

幡



禪堂前客版

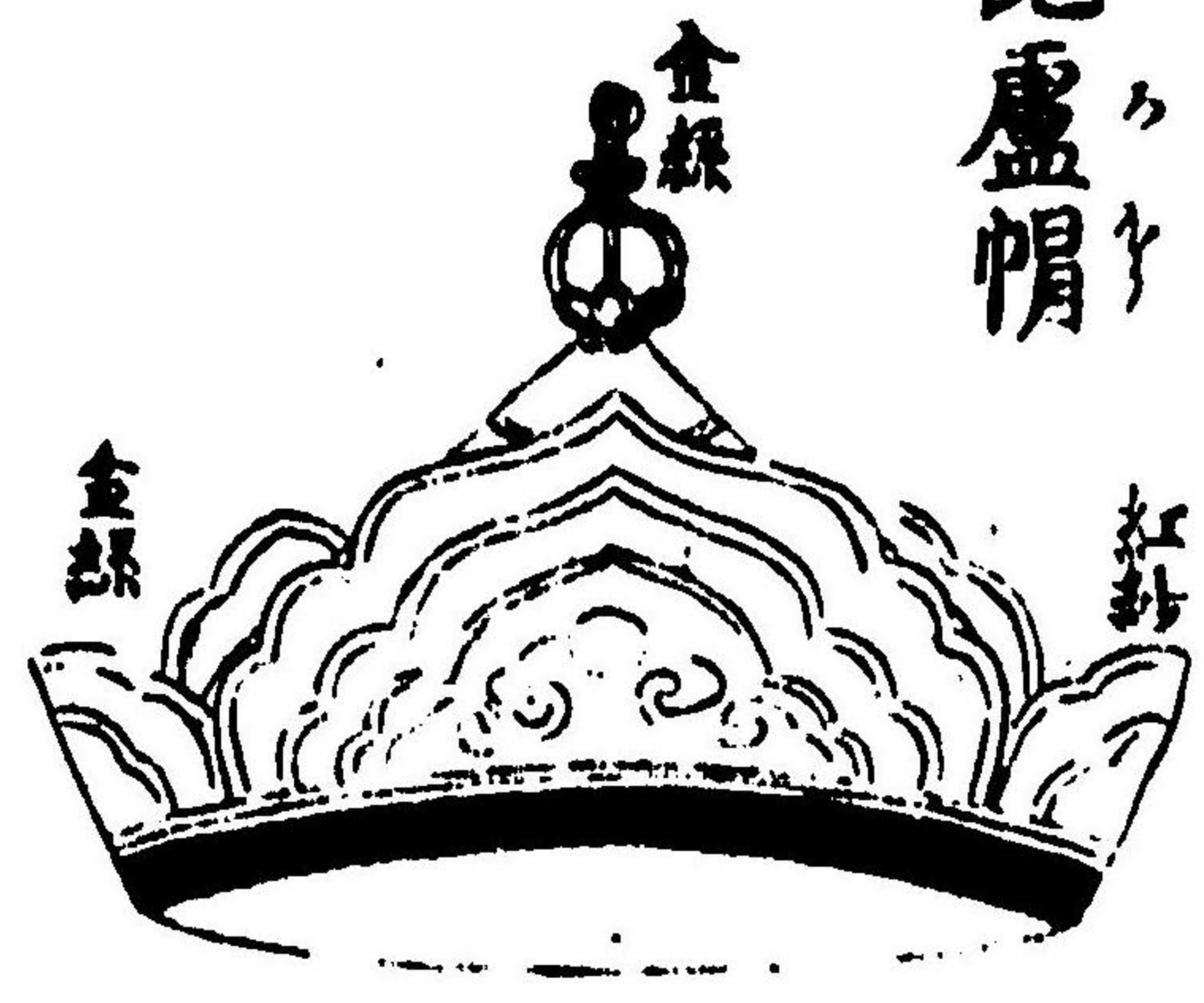
尊客欲入堂知賓鳴
版三下堂內開門



中座鈴



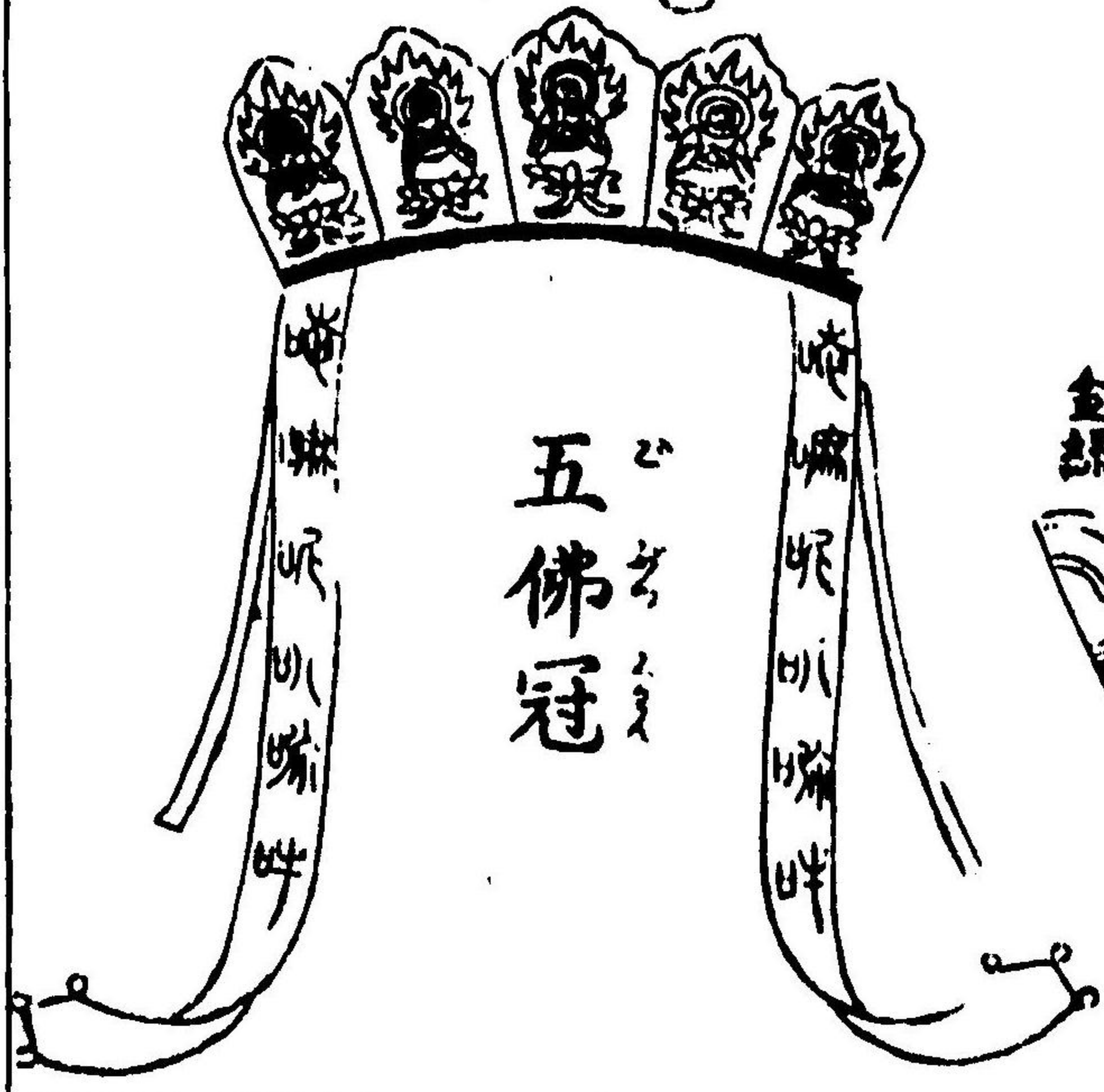
毘盧帽



扶座鈴



五佛冠



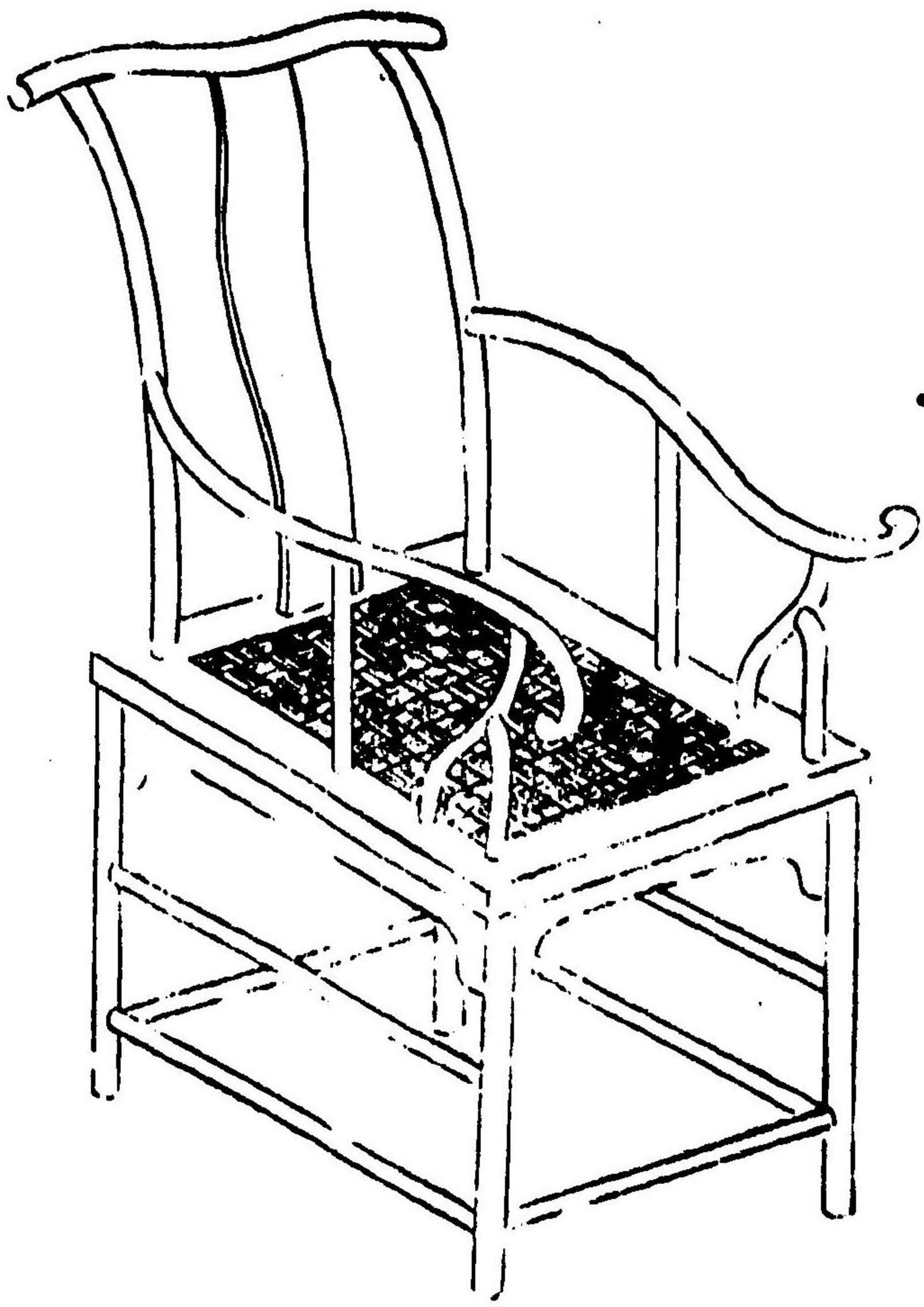
僧具

七

毘盧帽五佛冠合帶之圖



椅子



満洲 桂洞 荔枝 其外砂糖菓子時候の菓物種々供具茶湯方二間寫二間を
 胡桃 落花生 燗口壇を設け正面を觀望の儀成安置一寶鏡等の供具を傍付すは
 香花點燈供物具合供を定式の供物あり一盃饅頭七の酒水一盞此二品を
 供入檀の向ゆる同く燗口壇の毘盧壇を設け上壇み七佛の名號を書き
 牌を傍 七佛の釋迦觀音阿彌陀地藏 下壇みと面然大士護法龍天の牌を
 香花を供入點燈供物等ありを定式の供物あり胎み又九半坪は
 さ二三人の食卓を設け水陸一切男女孤魂等位と書記一香花點燈供物
 茶のぶとく定式の供物あり大尺ある蓋に飯を堆く盛酒水を多く供入其
 茶の 二間廻り九尺の竹を籠を山の形み捲く金銀の竹泊紙其外錢幣
 眞衣紙等みく張たふ成二重なる金銀山一々錢衣山と記したる儀成支編
 任の僧七人 燗口壇み昇る奉後を金剛上師とす 一名成中 左の太

杖産有副杖産と云はれ元と其の元並に何れも椅子み坐し下はら大敷小敷
小鏡鏡等傍付の物成誦法み連く大坂の内一人ゆく鳴川中社の僧の毘盧帽
と云ふ佛冠を戴き鈴成振或は印成結ひ其餘杖産の僧の本意引替成打眞府の七
魂起度のたを信入するも其成誦法中次第しく取捨酒水成ぬく饅頭も杖字を
書食食室か向く投捨尚人眞達ゆく金銀鏡衣服を捨ふ意ゆく右金銀山珍
衣少成焼捨ふ此法を在家成めくもまよく夜陰成たふふ元二回時行もかふ
水懺と云同く佛成成殺け香死點燈供物等縮りかおれくを定成の供物
ふし其幅半同か書二回にの其成二行か其成僧五人宛都合拾人の僧
まこれ佛具成持何れも贖成誦法成此法を首書しし一日中成入る二日成
結成もあり縮り水懺もに年成法會成限るべ成内安全上柄と氣平念等の行
禱も執り何れも絶主の成に任せく自定めくも執行成其時とは是諸道

具寺より持越其供養成應じて僧の多少ありを其時親類朋友をも招き
僧侶打込齋非時等振成奉成あつて法事平止其日教成あつて労働金成して
僧一人前二三十日以下僧の高下施主の身分成應じて送成奉等くび成若
宅狭き成或は故障成等ゆく寺に佛事を頼む時と前成奉料を納む成施主
の求り成應じて供成及具時と寺ゆく齋非時の用意成取し施主ゆくび成施
主の親類朋友成施成成此成た成施主の方成と男女成もみ成ふ成と成女の同成
別同成成り成の附成成奴婢成等成供成して僧侶と到成其成持成投成後成た成れ成
此同成入る成(○)在家の位牌成寺洗成成成す成奉成成た成成奉成成位牌
堂成てもれ成考成格成寺成成あ成功成成檀成越成別成位牌成成成成あ成
香成成供成成す成奉成成(○)在家成中の時成日成誦成頼成む成め成又成七日成毎
み頼成もあり何れも絶主の求り成應じて喪葬の時成僧七八人成あ

樞の先かまき平み指めくまうらふか膳を持二行めあへび墓所近は
添誦経の定式めあへび檀越まを頼られ行事あり

○七月盆ゆき寺院めあへび施餓鬼執行すか所めあへび其寺の古格めく執
行せむか所めあへび○十二月八日を臘八ふ朔日と八日の曉まで昼夜一山の僧

禪堂めあへび座禪あふう一日めあへび菓茶の粥を炊れ
龍眼 果茶 次成 華勝 煮

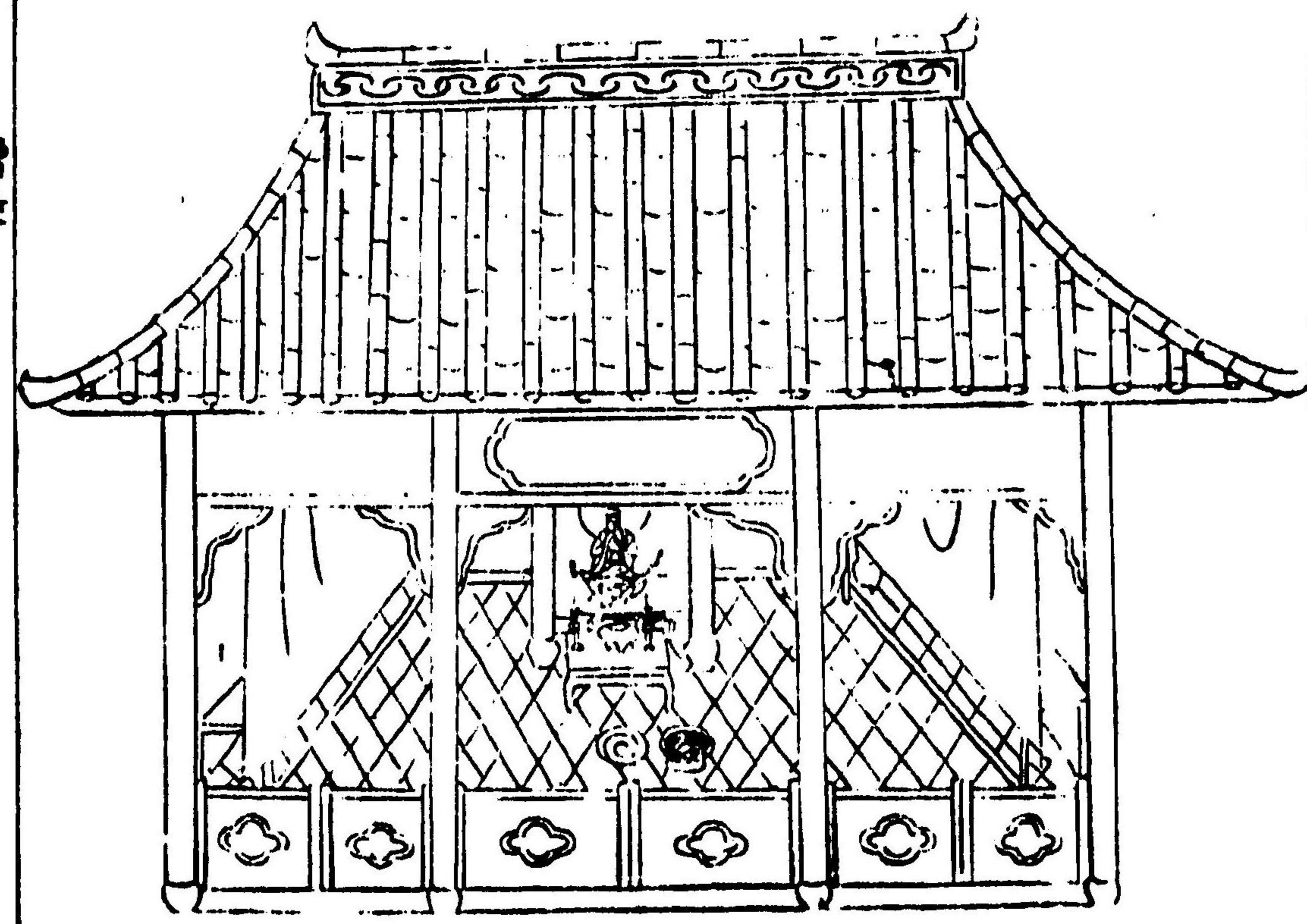
何れも吃一懸意の檀越人も送ふ事あり

○御祈願所かまき左極もか寺院か御祈禱の節の勅読めく何れ此
何寺へ中付よめあへび其寺へ頼遣は又か官前の見斗ひをぬく修行

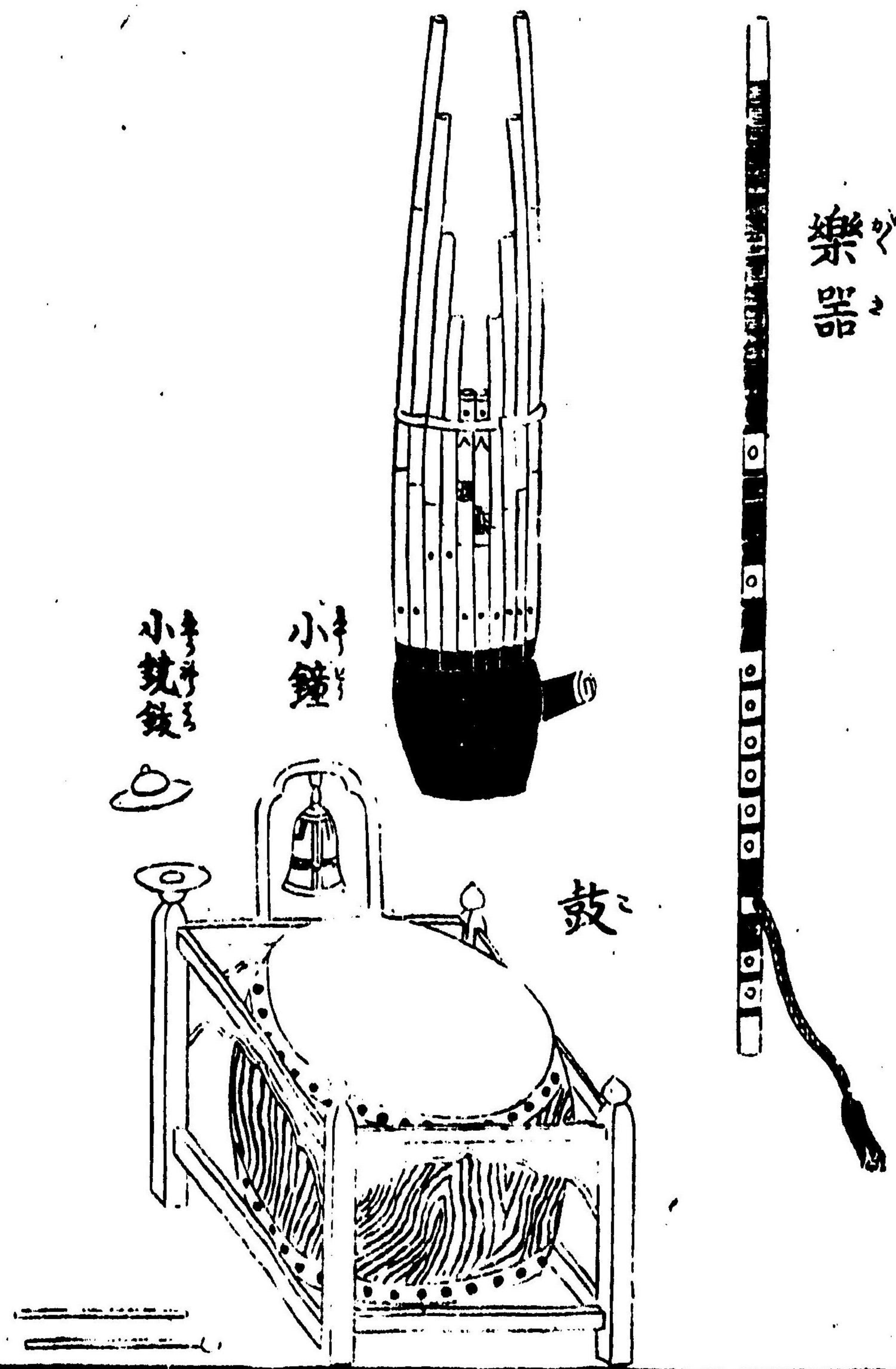
りせむか事めあへび其寺のめあへび一等めくか寺院めく護摩神園守札
等を天子諸官所等へ獻すか事めか寺樹と道家めか事めく行い

僧めあへびか事めく

禪堂之式



樂器



○官人責末詣の事と前以達一ゆふ人其時刻の官位の高下にも依持並に

役僧山門を出迎せしむる次第は諸部が律堂にておる者版と入臨成叩け法堂

の門外に法僧徒らばおる山官多しは役場中出迎ふ大なり時と鐘撞の鐘撞

撞を鼓を打めしと樂成養して佛殿へ請に佛拜するに加客の各業同一に

並に方丈一佛の様子を設け成成請に侍持對座し加客側は侍坐値座の

茶菓子其外時候の菓物等差出はたしひみ疾く腹の挨拶おきて御座るを

酒烟事と林おいておるに時ゆめえのさく山門を打おる此は客の返事

香金とて多少ぬつて金銀成るはけり

○庶人末詣の時の先佛殿に禮拜し並に佛坐もあつ又と客殿ゆくあらう

休息とておる客の應に値座とて茶をさしおるひもあつ或は菓子菓物等并

あつ其品等叩けし若は持用向あつ又訪ひのた見入もた並に値

座一返成相し方丈お少の面後以廣人ありとて大戸の人を置きおき
 の送迎は儀の貴賤高下お拘り客殿お主人を銀錢の形列お見合
 香金を置きお入りと後香壇等置きお婦女お侍の時も併拜のし中
 お席もあつて又替り客殿お休息すおあつては僧侶一人も置かぬ
 婦女の休息ありおお敷けおとて置きおくもておとては十三威の小沙彌
 持出お都く寺院お婦女御伺すお事置く官制ありお請近の事お苦
 后官の官女等お美清の儀と天子御系指お止り附随いお請す止やも
 官女およりお請すお事お一
 年始とも官女おお事おく檀家とて任持自身お禮お事おあつて
 役僧の内とて某山某禪寺納果叩と書おお信持と書お事おあつて外
 札守おたつお事おく元旦とて二日とて在おお事おあつて在おお事おあつて

常にお往來談話すお事お在おの者お置お事お一任り歳暮お檀家
 野菜菓物お漬お糖漬等たつお事おあり
 本山組合等の事お一御朱印地とつお事お一且後任お定むお事お一山
 の役僧評議して任お置おお傍を置其比の如懸人伺お如妹一存お
 後任お渡お任お置おお傍を置其比の如懸人伺お如妹一存お
 お名お三人任お書お一官一更中お出お下おの指揮おあつたお首役傍中
 おも頼お官おお評議あり役僧中より選おしたお名茶の内とて又外お官
 一列の存おおお其お傍中選一雙方一更の上後任お定むお寺の官お評
 議おあつた
 〇後任進山の時の吉日お擇り入寺お其時お首座以下の役僧
 山門外までお出お
 此時格式の法給あり
 互にお礼拜おして寺内へお鐘を撞木
 教を教お知お入り諸堂案内して拈香一式法誦く方丈へお替りお置

夫らと奉堂の若くは設けのふ檀の登り柱杖を突掛子を持つ侍者二人尤もは徒入衆の拜をさすは二山の傍悉く如く法僧の
種々の妻氏尋問のまゝ教示のしる香成のて禮拜の規式早く官座人由も其
法僧の自らも入寺檀のむむ世常扇の物のちよまき

○僧の妻等の禁制ありを應付僧とて妻等ありあつても肉食の傍め
市中の住居一在家には奉誦経等類の儀に執り以を應付傍と
名住居との中へ入めくは如くは事なきのめれ

○律宗の区稀あり天竺の天台山一山限めく外も一律宗の重み新
儀成修し綿服を着し流色の本綿の衣着し一鉄持を持食米の傍
鉄持の飯菜共み入着成用はじめく吃す天竺の傍の法式は事同
僧道所持の寺院あり寺院の僧侶よりあり

○寺院内のみ茶店等ありはとも狂言芝居等の事ありてふ一狂言芝居角
力輕業等の事ハ社内内限の真行也

○道家の有髪中道冠を戴き法衣の禪家の如くみく何れも綿服あり
業化の密法を修し新儀の事也此向太上老君の修法成行者者清
帯めく別張天師の類ありは正一道士とも其外雜部修儀の分き

○書常肉食はくまの市中の住居を火居道士とも業化を初ふ事あり
○僧道違犯不如法の者ありは輕免事ハ一山の住持とて寺法道法あり
行ひ若重免罪ありは其山の官をを執りは加縣を府めく裁断あるを

大派ありは假令住持大和尚たりとも官をより執られ罪の住まはるは重
ふなり ○道法は支配するも禮部の惣支配も禮部の不用の僧道官
僧録司道録司ありは官ありてまは司

道士

道冠



○ 護符等の事ハ僧家と執りせし道家もく居たハ道家の事尊ハ極く三清上

帝を祀ふ 三清上帝ハ中央玉清元始天尊行々 上清靈寶天尊九太清道德天尊 道家も邪く寺と同様やく一山あるも

市中に居位をともあり社稷傍付等ハ其の傍家外無ふまけ一道士も其

廻り深山み入行法修行せむ事あり其の傍家外無ふまけ一道士も其

○ 且那と海軍供方ともあり一山にても其の傍家外無ふまけ一

○ 江湖ありひみ結夏けまの界常とも在来の都ふたれみ

清俗紀聞卷之十三畢

亥部青圖章須

認印信爲真

清俗紀聞跋

向者余之在崎陽也聽政之暇使官
屬近藤守重林負裕問清高其國之
俗習輒隨筆焉又隨圖焉終成一書其
起稿之始余偶罹疾而百事皆廢及
愈瓜期已迫故未脫稿齎還江戶爾後

劇職不暇翻閱因命臣津田永郁校
訂分為十三卷示諸林祭酒請序其端
且請名書祭酒名以清倍紀聞且序而
還之或勸上本公諸同好遂命剞劂
不日而刻成矣澤正甫中伯毅亦序其
端嗚呼雖編輯之名在余彼官屬

等力實為多矣豈可虛其功哉因
備記于此後者姓名于卷末云寬政
己未冬十月中川忠英跋

赤峰脇田順書



大通事

高尾維貞

彭城斐

清河璧

平野祐英

彭城明矩

神代文鳳

穎川良友

彭城昌尊

吉島潜

小通事

神代干貴

陽忠廉

平井惟德

穎川惟賢

中山保高

彭城以貞

游竜賢

石崎融思

安田素教

畫工

清國蘇州 孟世燾

蔣恆

顧鎮

費肇陽

王恩溥

周恆祥

任瑞

湖州 杭州

嘉興

寬政十一年己未八月新鐫

明治廿七年十月十二日翻刻印刷
明治廿七年十月十五日發行

發行書林 東京日本橋區本町三丁目
印刷者 大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地
博文館

谷文晁先生輯画
谷文晁本朝畫摹本
全四冊 定價二圓
羽田子雲先生增補

龜田鵬齋谷文晁兩先生序
光琳百圖
全二冊 定價四十五錢
抱一上人編

松濤軒長秋先生編
江戸名所圖繪
全二十冊 定價四圓
長谷川雪旦先生画

岡山長先生編
江戸名所花曆
全四冊 定價三十五錢
長谷川雪旦先生画

齋藤月岑先生編
東都歲事記
全五冊 定價四十五錢
長谷川雪旦先生画

狩野探美先生題画
探幽
聚珍畫譜
全三冊 定價四十五錢
狩野應信先生編集

112
113

